

学生レポート

「学生が変わる日本大学」 —「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」に関する報告書—

竹田蘭丸^{1), 2)}, 土屋怜王^{1), 3)}, 古家凌成^{1), 4)}, 渡部大雅^{1), 5)}, 高野敦子^{1), 6)}, 後藤菜月^{1), 7)}
合原嘉成^{1), 8)}, 西村憲人^{1), 9)}, 柴田大輝^{1), 10)}, 曾山はるか^{1), 11)}, 佐藤喜一^{1), 12)}, 垂見麻衣^{1), 13)}

¹⁾「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」学生スタッフ, ²⁾日本大学国際関係学部国際総合政策学科2年,
³⁾日本大学経済学部経済学科2年, ⁴⁾日本大学商学部商業学科4年, ⁵⁾日本大学文理学部中国語中国文学科3年,
⁶⁾日本大学経済学部金融公共経済学科3年, ⁷⁾日本大学国際関係学部国際教養学科3年,
⁸⁾日本大学法学部法律学科2年, ⁹⁾日本大学国際関係学部国際教養学科2年,
¹⁰⁾日本大学生物資源科学部生命化学科2年, ¹¹⁾日本大学生物資源科学部動物資源科学科2年,
¹²⁾日本大学通信教育部法学部政治経済学科1年, ¹³⁾日本大学通信教育部商学部商業学科1年

本稿は、「令和3年度日本大学 学生FD CHAmmiT」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果より、学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べた活動報告書である。「日本大学 学生FD CHAmmiT」は、日本最大規模の総合大学である本学のスケールメリットを活かし、学生と教職員が互いの視点から授業改善について議論し、その具体策を考案する学内イベントである。本会は「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」として始まり、今回で9回目を迎えた。本活動報告が今後の日本大学の「学生FD活動」の更なる発展に貢献することを期待する。

キーワード：FD (Faculty Development), 学生FD, 「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT, アフターコロナにおける授業改革」

はじめに

「日本大学 学生FD CHAmmiT」とは、全国の大学が集結する「学生FDサミット」の「日本大学版」である。「学生FDサミット」とは全国の大学から学生FD活動に取り組む学生・教員・職員が一堂に会し、各大学における活動や成果を発表し合い、大学教育における課題等を共有し、議論する場である。一方、「CHAmmiT」とはchatとsummitをかけた造語であることから分かるとおり、大学をテーマに友だちとチャットをするように気軽に話し合い、その成果を発表する場である。私たちが学ぶ大学の教育をより良くしたいという思いに基づき、学生のみならず、教職員が参加していることも大きな特徴である。

今回で9回目を迎える「令和3年度日本大学 学生FD CHAmmiT」(以下、CHAmmiTとする)は、参加者はオンライン形式、学生スタッフは対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、245名の参加があった。学生スタッフは感染対策をしながら、ファシリテーションを行うことができた。本年度は、昨年度の議論内容と照らし合わせながら「セッション」を運営するという深い内容となった。

1. 今年度の「CHAmmiT」の概要と流れについて

今年度の「CHAmmiT」は昨年度の学部提案書と重ね合わせながら、より良い意見を抽出できるようにテーマを策定した。そして、CHAmmiT当日は、学生と教職員がオンライン授業という未だ課題の多い事柄に対して、しっかりと話し合うことができたと自負している。以下、当日までのスタッフミーティングの様子と当日の動きを要約する。

1-1 第1回スタッフミーティング（令和3年6月19日）

初回ミーティングではCHAmmiTの概要を学生スタッフに説明し、今年度のテーマである「アフターコロナの大学教育の在り方×コロナ禍の現況を踏まえた上での質向上」に沿ったテーマとして「アフターコロナでの学修スタイルはどうなってほしいのか？」について、グループごとに分かれて話し合った。話し合った内容をGoogle Jamboard（以下、Jamboardとする）にまとめ、全体で共有した。Jamboardを初めて使うスタッフも多かったので、ツールに慣れてもらうためにも、より身近なテーマを設定した。

学生からは、従来の対面授業の再開のみならず、コロナ禍において普及したオンライン形式の授業のメリットを最大限に活用した、ハイブリッド型の授業を希望する意見が多く挙げられた。教職員からも、学生と同様に、オンライン授業を継続的に活用した授業展開に関する意見を確認した。どのグループの議論も活発に行われたものの、初回とあってJamboardの使い方に慣れていないことから、回数をこなして慣れる必要があるという問題を確認した。

1-2 第2回スタッフミーティング（令和3年7月3日）

第2回ミーティングでは、第1回で挙げられた意見を共有し、「オンライン授業の在り方～オンラインになっても大学に行くメリットは何だろう？～」というテーマについて、グループに分かれてJamboardを使って議論し、その後に全体で共有した。

コロナ禍において、多くの授業がオンライン化された。オンライン授業は対面授業の単なる代替手段でなく、オンライン授業ならではのメリットがあることを多くの参加者が指摘した。従来の対面授業の復活と共に、こうしたオンライン授業のメリットを継続して活かし、両者の「いいとこどり」や併用を望む意見が多く出された。

大学のキャンパスに行く価値については、教員とのコミュニケーションによる授業外での知識修得、大学の施設設備を活かした授業、研究の実施、同じ目標をもった仲間との交流、コミュニケーション能力の向上など、様々な意見が出された。

1-3 第3回スタッフミーティング（令和3年8月21日）

第3回ミーティングでは、「日本大学に学部を新設する場合の学部名と設置する場所は？」というテーマについて、グループに分かれてJamboardを使って議論し共有した。

今回からグループのファシリテーションはコアスタッフではなく、学生スタッフが練習を兼ねてファシリテーターを務めた。その為に、取り扱いやすいテーマを設定し、結論が出やすいグループワークを実施した。現在の日本大学のキャンパスの利便性の良さはそのままに、サテライト拠点の設置や、文系では社会学部、コミュニケーション学部、理系では看護学部、理学療法学部、中間学部として総合政策学部、情報学部などの新規設置の要望が出された。

そして、これまでの3回のスタッフミーティングを通して、いくつかの改善点が見つかった。Jamboard

の使い方や、整理方法についてまだ慣れていない学生が多く、グループディスカッションでの意見を発表しやすい形に体裁を整えることができていない学生が多かった。これらの点を確認することで、必要なスキルを再度確認するきっかけになった。

1-4 第4回スタッフミーティング（令和3年9月11日）

第4回ミーティングでは「あなたは、なぜこの学部を選んだの?」「コアスタッフ及びミーティングへの要望」という2つのテーマについて議論した。

学部を選んだ理由として最も多く挙げられたものは、学修・資格取得、日本大学ならではの充実した施設・立地の良さ・ネームバリュー、卒業後の将来の目標達成への目的であった。さまざまなジャンルでの活動が盛んであること、実験設備の充実、資格取得支援の充実、他学部との交流ができることなどの意見もあった。

コアスタッフ及びミーティングへの要望では、本番がどういった形になるのか漠然としていて流れが把握できていなくて不安であるという声が上がった。ミーティングに対しては、スタッフ間の親睦をより深めたいという要望も上がっていた。今後は一気にスピードが上がり進路修正は容易ではなくなる。この段階でコアスタッフ・学生スタッフ間の疑問点や改善点を把握する事で CHAmmiT 成功につなげたい。

1-5 第5回スタッフミーティング（令和3年10月9日）

第5回ミーティングでは、本格的なファシリテーションマニュアルの読み合わせと、本番を想定したセッション1の「キャンパスライフのメリット・デメリット」について、グループで共有した。

ファシリテーションマニュアルの読み合わせでは、ファシリテーターの役割を明確にし、本番でより良いファシリテーションが行えるように確認を行った。ただマニュアルを読むだけでなく、いかに沈黙の時間をなくし意見を出し合える時間にするのか、そしてオープンクエスチョンとクローズドクエスチョンをいかに使い分けるか、またメモを取りうまくまとめるコツなどについて共有した。キャンパスライフのメリットとデメリットについては、学生生活から得た経験を基に日本大学の教育現場の課題や良いところを Jamboard に書き出し、グループで共有した。

1-6 第6回スタッフミーティング（令和3年10月23日）

第6回ミーティングでは、ファシリテーションマニュアルの共有と、本番を想定したセッション2の「アフターコロナの日大の教育」について、グループで共有した。

長期にわたった緊急事態宣言が解除され、授業もオンラインだけでなく対面式での授業が少しずつ増えてきた中、コロナ禍において導入されたオンライン授業を終息の方向に持っていくのではなく、ハイブリット型授業をはじめとする IT 化された授業や講義を今後どう取り入れ、活用していくのか、そしてどのような形で、学生・教員・職員にとってよりよい大学生活や教育に繋げる事が出来るのかを議論した。

1-7 第7回スタッフミーティング（令和3年11月6日）

第7回ミーティングでは、前回ミーティング同様にファシリテーションマニュアルの共有と、セッション3の「IT化と大学教育～学部への提案～」についてグループで共有した。

昨年度の各学部の学部提案書に基づく改善報告書に取り上げられた改善点や提案点との繋がりや、合致する点はあるのかに着目して議論を進めた。

ファシリテーションのスキルに個人差がある為、ファシリテーション練習会を1週間の期間を設けて行った。

1-8 第8回スタッフミーティング（前日リハーサル）（令和3年11月27日）

前日リハーサルでは、コアスタッフは午前10時に集合し、最終的な流れ確認、それぞれの会場の確認、パソコンなどの接続環境の確認、オープニングとエンディングの最終確認を行った。

その後、13時から学生スタッフ全員と教職員で最終的なリハーサルとして、当日のファシリテーションマニュアルの読み合わせを行い、その上でファシリテーションのコツを再度共有し、当日と同じ時間配分でセッションの最終練習を実施した。その後、全員で全体の当日のスケジュール確認を行い、質疑応答を通して、メンバーの不安解消を図った。

1-9 令和3年度日本大学 学生FD CHAmmit 当日（令和3年11月28日）

令和3年度は昨年同様にオンライン形式（Zoom）、スタッフは対面とオンライン形式によるハイブリット形式での開催となった。

学生からの提案により、スタッフと教職員は事前にZoom背景を統一し、スタッフの一体感を強化した。また、セッションで使用するJamboardは、使いやすいように事前に色分けの説明の付箋を付け、セッション2で昨年度の学部提案書を参考にしやすいように直接各学部の学部提案書を確認できるリンクを用意した。

1-9-1 10:00 スタッフ集合

現地参加スタッフは日本大学本部大講堂に集合した。

今年度のCHAmmit スタッフTシャツを配付し、出欠を確認後、集合写真を撮影した。キャプテンの挨拶に始まり、当日の流れを共有し、適切なソーシャルディスタンスを確保するためにいくつかの会議室に別れてZoomに接続し、準備した。

1-9-2 10:30～11:00 スタッフ最終打ち合わせ

オンライン参加のスタッフを含めスタッフ全員で、当日の流れの最終確認を行い、ファシリテーションマニュアルを説明し、質疑応答を行った。

1-9-3 12:30～ 一般参加者受付開始

コアスタッフにより参加者の出欠確認を行い、順次確認ができた参加者の入室を行った。

事前にZoomでの名前表示の設定をしてもらった入室管理であったため、入室はスムーズに進んだ。入室管理では、出欠確認と共に、それぞれのセッショングループにおける人数調整の要否確認を行った。そして参加者に対しては、注意事項の説明をスライドで行った。

1-9-4 13:00～13:30 オープニング

オープニングムービー、日本大学FD推進センター長である青木副学長と竹田キャプテンによる開会挨拶、参加者の参加場所アンケートの実施、CHAmmitについての説明がそれぞれ行われた。そして当日のテーマとスケジュールの共有、注意事項の案内や、より楽しんでもらうためのコツの共有が行われた。その後、ブレイクアウトルームへの移動を開始するアナウンスを行い、それぞれのグループへ移動した。ブレイクアウトルームでは、ファシリテーターがタイムキープしやすいように、ブロードキャスト機能で残り時間のアナウンスを適宜入れた。

1-9-5 13:30～13:40 アイスブレイク

ブレイクアウトルームに移動し、グループのメンバーが揃ったグループから、簡単な自己紹介と「コロナ禍で得た趣味」、「無人島に持っていくなら?」というテーマで、自由に会話を楽しんでもらった。

アイスブレイクは、学部の異なる参加者同士が初対面でも会話を楽しんでもらう機会とした。

1-9-6 13:40～14:05 セッション① キャンパスライフのメリット・デメリット

セッション①では、学部を交えたグループに分かれ、キャンパスライフのメリットとデメリットについて議論した。このセッションでは、オンライン・オフラインのメリットとデメリットの4象限の意見をJamboardの付箋機能を使って共有した。参加者の学生生活から得た経験を基に日本大学の教育の課題や良いところを学部の違う仲間と共有することで、参加者の視野を広げたいという狙いがあった。セッション終了後、一度メインルームに戻った。

1-9-7 14:10～14:20 アイスブレイク

セッション②・セッション③は学部ごとでのセッションで、セッション①とは異なるメンバーでのグループワークとなるため、セッション①の前と同様の内容でアイスブレイクを行い、自由に会話を楽しんでもらった。

1-9-8 14:20～15:10 セッション② アフターコロナの日大の教育

セッション②では、セッション①で共有した内容を活かし、昨年度の学部提案書で取り上げられた改善点や提案点との繋がりや、合致する点があるかを、学部別のグループで共有した。繋がり（合致する点）がある場合は重要度が高い項目であり、繋がりが無い場合は新たな課題となる可能性と区別した。昨年度のCHAmmitを元に作成された各学部の改善報告書で「実施不可」、「検討中」とされた項目やセッション①で「新しく出てきた課題」についても議論した。

進行はファシリテーターが行い、グループで出た意見はJamboardの付箋機能を活用し、参加者協力のもとJamboardを完成させた。

1-9-9 15:20～16:00 セッション③ IT化と大学教育～学部への提案～

セッション③では、これまでのセッション①とセッション②で議論・共有した内容を活かし、学部に提案したいことについて話し合った。そして、これからのIT化と大学教育について考え、改善策を見出し、提案書を作成した。昨年までの状況を整理し、IT化出来そうなものを、今までのセッションでの意見を参考に提案した。

1-9-10 16:05～16:30 エンディング

エンディングでは、セッション③で作成した学部提案書をそれぞれの学部を代表して危機管理学部、経済学部、生物資源学部の3学部の学生に発表してもらった。全学FD委員会プログラムワーキンググループリーダーである松戸歯学部平山教授と、土屋キャプテンが挨拶を行い、エンディングを締め、最後に集合写真撮影し、エンドロールを流して令和3年度CHAmmitは閉幕した。

当日は事前の綿密な役割分担、リハーサルもあり、最後まで滞りなく開催することができた。

2. 参加者の制作物の分析

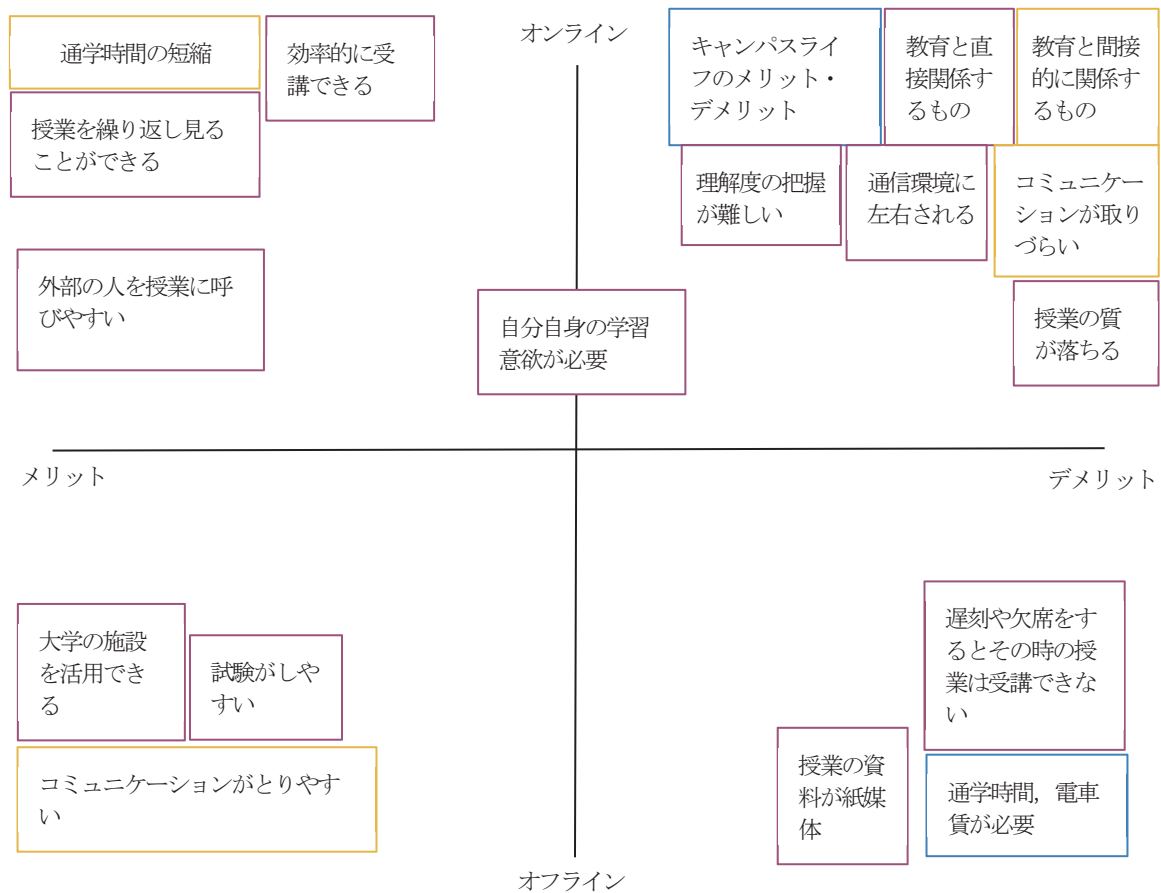
本節では、「令和3年度 学生FD CHAmmiT」のセッション①～③の制作物の分析を行う。

2-1 セッション①（キャンパスライフのメリット・デメリット）

セッション①では、学部混合でのグループに分かれてキャンパスライフのメリット・デメリットについて話し合った。

以下の図1は、ある学部の実際の話し合いの内容である。このように、4象限の図を用いて、オンラインにおけるキャンパスライフ、オフラインにおけるキャンパスライフという観点で、それぞれメリット・デメリットをあげた。日本大学の学生に関わらず、コロナ禍の大学生が感じていると思われる意見が多く出た。セッション②での改善点をより明確にするためにも、このセッションは重要であり、様々な意見が出たと感じている。

図1 セッション①



出所 筆者作成

2-2 セッション②・セッション③（アフターコロナの日大の教育）・（学部提案書）

セッション②では、同学部でのグループに分かれてアフターコロナの日大の教育について話し合った。セッション②は、「昨年度の提案」を現状の整理として、セッション①で話し合ったメリット・デメリットと現状の整理で似ている意見があれば、重要度が高いものとして話し合うというセッションであった。また、次に行うセッション③では、学部提案書を書くため、一年経った現在、新たに困っている事なども検討して、話し合った。その結果、日大生専用のアプリの開発や、学校内の混雑位置を示すパネルの開発、健康観察の簡略化などコロナ禍の日大生が普段感じていることが意見として多く出た。全体的に革新的な意見が多く、オンライン授業も様々な活用方法がある事を知ることができた。また、昨年度から提案し続けている事物に関しても、実施不可の場合を除き、しっかりと話し合うことができた。以下、他にも様々な意見が出たため、表1として記すこととする。

表1 セッション②, セッション③

学部	現状の整理	新たな課題	提案
1 法学部	<p>a. 課題・使用・授業の配信の形式の統一化をしてほしい。</p> <p>b. 学生間でコミュニケーションがとれない。</p> <p>c. 1年生にアドバイスする機会がない。</p>	<p>d. Zoomの次に対面授業の場合、Zoomを学校で受けられるようにしてほしい。</p> <p>e. 大学のWi-Fiを使いやすくしてほしい。環境を整えてほしい。</p> <p>f. ポータルサイトが使いづらい。</p> <p>g. オンラインだけだとお互いの情報交換ができない。</p>	<p>a. YouTubeで統一する。 →利便性が良い。 全学部で統一すれば費用が抑えられる。</p> <p>c. SAAS（多機能なクラスルーム） メリット > 統計データが取れる。 デメリット > プライバシー権との関係。</p> <p>サークル認知のための活動をする。 →新歓用の学園祭をする。 →サークルが一覧できるクラスルームを作る（新入生が自主的にみるかどうか）。</p> <p>d, e. Wi-Fiの設備を整えればよい。 →デメリット：費用が掛かる。</p> <p>f. ポータルの仕組みの改善 →一定期間経つと閉じてしまう。重要な知らせがわかりづらい。都度パスワードの入力が大変。</p> <p>その他・課題の幅を指定する。 >同じ科目でも先生によって課題の量が大きく異なることがあるため差を軽減。</p>

<p>2 文理学部</p>	<p>a. 学生同士の交流の場を設けてほしい。</p> <p>b. 学生同士のZoom企画を、自ら立ち上げたい。</p> <p>c. 成績評価基準を教員同士で共有および統一化してほしい。</p>	<p>d. 対面出席者とそうでない人との間の公平をどう保つか。</p> <p>e. 1. 2年生の時にできなかった実習や実技の対応。実験・実習の簡略化。体験の場の減少。</p> <p>f. 対面化によるリモート慣れを配慮した対策。また、教科書の持ち運びが苦。</p> <p>g. 留学生への対応。</p>	<p>d. 学生証スキャンによって、授業への出欠席などの管理。これを用いた成績の優劣。</p> <p>e. オンラインで基礎、対面で応用。</p> <p>f. PDFの配布の継続。 →対面もリモートでもPDFで板書、レジュメの確認ができるようにする。ただし、意欲の有無による公開の差別化は必要。</p> <p>g. 帰国せずにオンライン化など。時間などの考慮が必要。</p>
<p>3 文理学部</p>	<p>a. 交流の機会がない。</p> <p>b. フィードバックの実施や授業評価の細かい説明がほしい。</p>	<p>c. メンタルヘルスのケアを行ってほしい。</p> <p>d. 授業の組み方が大変だった。</p> <p>e. コミッツ（文理学部ポータルシステム）やブラックボード（文理学部遠隔授業学習支援システム）が使いにくい。</p>	<p>c. オンラインでメンタルヘルスのケアを行う。 →アンケートの実施。 →知名度を上げて利用しやすくする。</p> <p>e. 通知をつける。 オンデマンド型の授業を対面の授業にも活かせるようにする（休んだ時も大丈夫になる）。</p>
<p>4 文理学部</p>	<p>a. 学生同士の交流の場を設けて欲しい。</p> <p>b. 学生同士のZoomでのイベントを学生が企画したい。</p> <p>c. 先生同士で成績評価の仕方を話し合って、評価の方法や基準を統一してもらいたい。</p> <p>d. オンライン授業でも、社会人聴講生を受け入れてもらいたい。</p>	<p>e. オンライン授業の環境による学修効果の差が出てきている。</p> <p>f. モチベーションの低下。</p> <p>g. フィールドワークなど実習ができない。</p> <p>h. Zoom交流会における参加率の低下</p> <p>i. 授業のZoomだけではその場で交流ができてその後の発展が難しい</p>	<p>f. オンライン授業の長期化による集中力、授業に対する意識の低下がみられる。 →発言の機会を教員側で働きかけて増やす。出席を必ず取る。 →Zoomにおいて、楽しめるような機能（ニコニコ動画のコメントみたいなもの）を使って、学修効果の向上を目指す。 →学校内施設（図書館など）で自主的に勉強できる機会を増やす。また、オンラインで閲覧できるようにする（電子書籍など）。</p> <p>h, i. 授業後にそのままZoomに残る形で交流会を開く。 →就活に関することや、授業に関することなど。 →クラスの代表などの役割を作って、クラス会を開く。</p> <p>j. オンラインとオフラインの両立の難</p>

		<p>j. 完全対面化できない場合のオンライン・オフラインの両立の難しさ。</p> <p>k. 学生と先生の間で信頼関係を築けていない。</p> <p>l. 授業形式の差が大きく、理解度に関連する。</p>	<p>しさ。</p> <p>→対面とオンデマンド型の2極化。</p> <p>→前後の授業の授業方法で対面が難しい場合もあるため、大学側で各授業の授業方式を把握する。</p> <p>k. 授業以外での関わりを作る。</p> <p>→コロナ禍以前は飲み会などで交流ができていたが、現在ではそれができないため、オンライン上でも気軽に交流できるような機会を作る。</p>
5 文理学部	<p>a. オンライン授業でも、社会人聴講生を受け入れてもらいたい。</p> <p>b. 学生同士の交流の場を設けて欲しい。</p> <p>c. 学生同士のZoomでのイベントを学生が企画したい。</p> <p>d. 先生同士で成績評価の仕方話し合っ、評価の方法や基準を統一してもらいたい。</p>	<p>e. オンデマンド授業の場合に質問しにくく、質問のハードルを下げてほしい。</p> <p>f. 授業資料のデータを長期間残してほしい。</p> <p>g. 対面とオンラインとを選択できる授業を今後も継続してほしい。</p> <p>h. ハイブリッド型授業を学内で受けにくい。</p>	<p>c. 学生が常に自由に使える運動のスペースがほしい。</p> <p>e. 掲示板の活用。</p> <p>→掲示板の周知度が低いので、積極的に宣伝してほしい。</p> <p>→編入生へのブラックボードの使用方法の周知を徹底してほしい。</p> <p>→掲示板の形式をSNS方式のような形にしてみてもどうか。</p> <p>→掲示板を設けない授業もあるので必ず開設してほしい。</p> <p>→質問のために講義の後に必ずそのまま開いておいてほしい。</p> <p>f. 対面授業に戻っても課題をオンラインで提出できるようにしてほしい。</p> <p>g. 縦の繋がりを意識した交流の場を設けるべき。</p> <p>→文系・理系の学科間で交流する機会を設けるべき。</p> <p>h. ハイブリッド型授業の際に学内においてオンライン授業を受講できる専用スペースを置くべき。</p>
6 経済学部	<p>a. 対面授業の増加に関して。</p> <p>→ゼミ以外にも増加傾向ではある。</p> <p>また感染対策に関しては教室定員の50%以下になるよう調整し、徹底をしている。</p> <p>b. 全体的な課題の量を削減。</p> <p>→各授業において課題の量が増えたという声がある。各授業の教員に一任して</p>	<p>c. 学部全体の設備の見直しを図ってほしい (通信設備等)。</p> <p>d. 学内システムを統一化してほしい。</p>	<p>c.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハイブリット型授業をする際など、電気供給や通信に限界を感じる。通信設備等の改修を行うことで学生・教員共に快適な学校生活を送ることが可能になる。 ・キャンパス手帳をもっと使用する機会を増やす。 <p>d.</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題の形式や容量に左右されない。 ・教員からの学生へのレスポンスが早くなりやすい(質問メールなど)。 ・課題等に関するなにかしらの上限制限を設ける。 ・学生のアクティビティの可視化。

	いるが、最低限ラインを設ける等、学部でも検討中である。		
7 経済学部	<p>a. 対面授業の増加。</p> <p>b. 全体的な課題の量を削減。</p>	<p>c. ハイブリット型の講義であるとして、テストの際に不公平さを感じる。</p> <p>d. 授業に遅れてしまう場合がある。</p>	<p>c. シラバスに授業形態を明示することを継続する。 →シラバスは履修するときに不可欠なもの。授業形態を理解したうえで履修することが重要。また急遽その回だけ授業形態に変更がある場合は、ハイブリット型授業を展開する。</p> <p>a, c. 対面講義ができるなら、同時双方向型の講義は廃止する。 →同時双方向型の講義は教室で講義ができないため行っていた。しかし教室で授業ができる体制が整うのであれば対面講義を導入してほしい。</p> <p>c, d. オフィスアワーを改めて周知する。 →オフィスアワーについて知らない人一定数存在している。また質問する人がたくさんいる時、結果的に質問をできないことがある。そのためスムーズに質問ができるようにオフィスアワーの仕組みや質問しやすい時間帯を明記してほしい。</p> <p>c, d, オフィスアワー以外でも先生に質問できる環境を整える。 →質問コーナーなどを作成することで、いつでも先生に質問ができるため、分からないことを早期に解決することができる。</p>
8 商学部	<p>a. 課題の提出方法及び期限が授業によって全く異なること。</p> <p>b. オンライン授業下において、新入生は在校生から授業に関して様々な情報を聞くことができない。</p> <p>c. オンライン授業の課題提出のツールを統一する（例Google Classroom）。又は管理ツールを作る。</p> <p>d. 在学生在が授業</p>	<p>f. 対面だからこそ質問がしにくい。</p> <p>g. 新入生に対しての発信の場がないこと。</p> <p>h. 相互履修制度を知らない学生が多い。</p> <p>i. 外部講師の方を呼ぶ機会が少ない</p>	<p>b, d, g, h. 入学の際に大学公式のlineグループを作り情報発信をする（「相互履修制度」についても流す）。</p> <p>f. 質問も含め、発言することで評価が上がるような評価方法を導入する（減点式じゃなくて加点式）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインの授業においての、公正なテストの実施（カンニング防止など）。 ・登校前の14日間の健康管理システムの記入義務は、改善してほしい。

	<p>について新入生に伝える場を作る。</p> <p>e. 他学部の履修を積極的にできるようにする。</p>		
9 商学部	<p>a. 課題の提出方法及び期限が授業によって全く異なる。</p> <p>b. オンライン授業下において、新入生は在校生から授業に関して様々な情報を聞くことができない。</p> <p>c. オンライン授業の課題提出のツールを統一する（例 Google Classroom）。又は管理ツールを作る。</p> <p>d. 在学生が授業について新入生に伝える場を作る。</p> <p>e. 他学部の履修を積極的にできるようにする。</p>	<p>f. 健康観察システム：期間を縮小して学生の負担を減らすことができないか。他大学の状況を考えると自由に登校できる大学が増えている。 サークルや部活でしか得られない経験を損なうきっかけになってしまっている。</p> <p>g. オンラインスキル：学生・教員でオンラインスキルの有無によって負担が変わってしまっている。 これにより学修効果が薄れている可能性があるため動画によって解決したらいいのではないか。</p>	<p>b, d. 新入生が先輩学生に対して授業のことを聞く。 全員が参加できるようなオープンチャットを作成することで解決できるのではないか。また、交流会を開催してブレイクアウトルームの人数を2~3人にする、ブレイクアウトルームで趣味について話せるようにするなど。</p> <p>・学部内でワールド・カフェ 1年生や2年生にとってはゼミやスポーツの友達しかいないので、学部内ワールド・カフェを行うことで交流の機会を作る。</p> <p>e, g. LMSの統一 他学部履修はLMSが統一されていないことによってできない。また、授業の受けやすさも新入生にとっては大事な要素になるのではないか。そのため、検討を続けることが必要なのではないか。 オンラインスキルの有無によって学修効果が変わることに対して、課題の提出方法や出し方を動画にしてわかりやすくする必要はないか。</p>
10 芸術学部	<p>a. 学生同士で交流できる場を設ける。</p> <p>b. オンデマンドにより、授業の理解度アップにつながる。</p> <p>c. 対面とオンラインのハイブリット授業。</p>	<p>d. 「学生同士で作品を見てコメントしコミュニケーションができるシステムについて」現在のGoogle classroomの機能だと、教員が課題を「質問」として出題すれば提出作品を学生同士で閲覧することは可能だが、他の受講生に見られないように、作者だけが見られる形でコメントを送れる機能はない。</p> <p>e. オンデマンド</p>	<p>d. 課題で作った作品を見てコメント、そこから同じ方向性を持つ人とコミュニケーションが取れるようなシステムが必要。 全員作品を公開して、作者だけに見られるようなコメントが送れる機能がある場があると良い（他SNSで突撃は勇気がある）。</p> <p>e. オンデマンド授業でも、高校などの放課後に職員室で先生に質問をするような感じで、授業外に短時間（授業外のため、学生も先生も負担にならない程度が望ましい）でリアルタイムで質問できるようなタイミングを設ける。</p>

		<p>授業において、学生が好きな時間に見られるという利点はあるが、質問に対しての教員のレスポンスが1週間以上かかることもある。</p>	
<p>11 芸術学部</p>	<p>a. オンデマンドで授業によっては理解度アップにつながられる。 →授業や課題の時間配分が曖昧で予定が立てにくい時がある。 →中途半端に日時を指定した再放送？的な授業があった。</p> <p>b. 対面授業でもオンラインとのハイブリッド（同時配信）を行うことで多面的な授業の活用とアーカイブ化を進める。 →授業をYou Tubeなどで配信してアーカイブを残す。 →芸術学部は著作物を使うことが多いため、記録を残すのがむずかしい。 →音声のみアーカイブ。</p>	<p>c. 事前、事後学修や課題の量に関する情報を受講前にわかった方が良い。</p> <p>d. 一人で課題解決に挑むことが多く、新たな意見の獲得が困難。</p> <p>e. ハイブリッドだと学校往復の時間もある中で、同じ日にやる別のオンライン授業で当日締め切りの課題がある。</p> <p>f. 著作物（テレビ番組）を普通にアーカイブしてくれる授業としてくれない授業があってムラがある。</p> <p>g. 【教員目線】ハイブリッドだと、対面参加者とオンライン参加者両方に気を向けるため、忙しくなってしまう。</p> <p>h. 限定コメントに書いてもほぼ気付かれない。</p> <p>i. オンライン授業だとレポート課題が多いがフィードバックが</p>	<p>c. 事前、事後学修や課題の量に関する情報を、受講前に告知してほしい（特に必修科目以外の授業には配慮を求める）。 →シラバスに明記。もしくは前週の授業で課題の量と想定時間を担当教員が明示すべき。</p> <p>d. 課題について意見を交換できる場が欲しい。 →きっかけを作る場として、ガイダンスなどを対面で行い、連絡先の交換する機会にしてほしい。</p> <p>e. 課題の締切を工夫して欲しい。 →授業外で取り組ませるレポートにおいて、当日締め切りを原則禁止にするべき。</p> <p>f. 著作物（テレビ番組）を普通にアーカイブしてくれる授業としてくれない授業があってムラがある。 →視聴しやすい手段を教員側で提示。著作権でアーカイブが残せない場合は、せめて音声のアーカイブを残すなどする。</p> <p>h. 限定コメントに書いてもほぼ気付かれない。 →質問の仕方をメールに統一し、教員にチェックを促す。</p> <p>i. 課題のフィードバックが欲しい。 →教員からだけではなく、友人からもフィードバックが貰える環境を整える。</p> <p>j. 「次回の授業で扱うんでこの番組見といてね」という時間外労働的なやつ。 →録画機器持っていない人はリアルタイムで見られないと次の授業終わり。 →授業内で必要な資料がある場合は、極力教員側で資料を用意し、学生が十分に学修できる環境を整える。</p>

		<p>ないので、的を射たことを書いてあるのか分かりにくい。</p> <p>j. 「次回の授業で扱うんでこの番組見といてね」っていう時間外労働的なやつ。→録画機器持っていない人はリアルタイムで見られないと次の授業終わり。 →授業時間と課題想定時間を合計90分と取り決めてはいかがでしょうか？</p>	
<p>12 国際関係学部</p>	<p>a. 定期的な先生と学生との交流の場について（オンライン授業において、オフィスアワーが機能していない）。</p> <p>b. オンラインサロンについて（コロナ禍において、学生同士で相談する相手がいない。Zoomを活用したオンラインサロン（交流の場）が欲しい）。</p> <p>c. 他大学の団体や全国規模の外部団体との繋がりについて（オンラインでの他学部との相互履修も実現して欲しい）。</p>	<p>d. 対面を開始しても、オンラインで授業を受ける学生の割合の方が多（先生方の視点）。</p> <p>e. インフラの整備（Wi-Fi）。</p> <p>f. 健康観察システムが厳格化されていない。</p> <p>g. 学食の場所が少ない。</p>	<p>b. 交流の場（オンラインサロン）を増やしてほしい（交友関係を広げる機会の増加）。 →オンラインで他学部だけでなく、海外の大学と交流することができるワールド・カフェのような場を増やして行く。</p> <p>d. 対面でやる必要がある授業とそうでない授業を明確に分ける。 →4年の卒論のように、オンラインでできるものは完全オンライン化する。 もっと対面で行くメリットがほしい。 →オンラインでもできれば、対面で行く必要がないため、ケーススタディーのような、実習型の授業を取り入れる。</p> <p>e. 誰でも自由にWi-Fiを使えるようにすることで、対面に来てオンラインの授業を受ける場合はもちろん学生の質が上がる。</p> <p>f. 健康観察システムをもっと簡略化する。 →ログインに手間取ってしまっていて登録していない割合が多く、学生にゆだねてしまっている現状がある。 →メールアドレスの入力記憶など簡略化する管理システムの改善等を行う。</p> <p>g. 北口の食堂の開放をしてほしい。 →本校だけでは、高校生と同じ場で食べるため、密になってしまう。</p>

<p>13 国際関係・短大三島校舎</p>	<p>教材の購入先が学生によってまばら。</p> <p>定期的な教員と学生の交流の場がオンラインにない。</p> <p>オンライン上で学生同士が相談し合える場を大学側で用意していない。</p> <p>他大学や大規模な団体との連携が求められている。</p>	<p>教材購入を個人に委ねる場合、在庫切れになるリスクがある。</p> <p>オンラインにおけるオフィスアワー。</p> <p>他団体・他学部との交流の場の需要に応える。</p> <p>新入生を学生がサポートする。</p>	<p>1. 学校を經由した指定ルート入手方法譲り受けや中古品購入などで確実に入手出来る方法をとる。 個人で新品を購入するという選択をなくす。</p> <p>2. クラブルームの限定コメント機能利用 他者の目や介入がないほうが気軽に相談しやすい。</p> <p>3・4. 日大公式のSNSグループチャットの作成 目的に合わせて別々のグループをつくる。</p>
<p>14 危機管理学部</p>	<p>学部単位でFD CHAmniTのような取り組みを...</p> <p>認知度が低いのは「実際に学部に学生意見が反映された」成果が見えない。 成果を確実にだし、かつスピード感をもって取り組む必要がある。</p>	<p>学生の意見を学部にダイレクトに伝える機会を設けスピード感をもって具現化してほしい。 理由：学生の不満を吸い上げる手段が「学修満足度向上調査」と「授業評価アンケート」の2種類しかない。 先生に意見を述べても改善される様子が見受けられない（伝えても改善されていない）ため、学部に直接伝える方法が欲しい。</p> <p>例：「対面・オンラインの選択を自由にさせてほしい」等の学生の意見が反映されづらい。</p>	<p>3年生各ゼミに調査し議論の場を作る。 来年再来年期の学生のためにある程度学習を済ませている上級生へヒアリング。</p> <p>学部長との交流の場を設け、学生の意見や声を直接伝え、交流する場を作りお互いの考えを伝えあう様子をライブ中継し学生の意見を反映する場を作成するべきである。</p> <p>実現しやすそうな具体例1：ゼミごとに数名ずつ学生を呼び、現状の改善を求める声を聞き出す機会を作成し、その内容をまとめたものを学部長に提出することで学生の意見を教職員の方々に伝える。 具体例2 SNSで学生の意見を反映させることのできるチャンネル・ポッドキャストを作成。上記1と合わせて、「吸い上げた学生の重見が反映される」ことを学部生に宣伝する。</p>
<p>15 スポーツ科学部</p>	<p>課題の量が例年に比べて多いと感じる。</p> <p>オンライン授業進行中にトラブル等が見受けられる。</p>	<p>1. オンライン授業のための自習室を増やしてほしい。</p> <p>2. オンライン授業サポート支部を作してほしい。</p>	<p>1. カメラon, マイクon専用の教室を開放してほしい。 →静かな自習室の中で話し出すのは忍びないため。</p> <p>2. オンライン対面のハイブリッド型授業を推進してほしい。 →座学（オンライン）で学んだことを対面（オフライン）で実習。</p>

	<p>通信環境障害発生時、授業に参加できない。</p>	<p>3. 健康観察システムに関して柔軟な対応をしてほしい。</p>	<p>→今週オンライン授業、来週は対面授といたスケジュールを作る。 →スポーツ科学部は学部の特色として対面で行わざるを得ないものがあるからオンラインだけでは不可。</p> <p>2. 対面授業動画をクラスルームでアップしてほしい。 →授業をやむを得ない理由で休んだ学生のため。</p> <p>→資料だけで授業を振り返るのは忍びないため。授業動画を上げれば、休んだ学生のリカバリーになるのでは。</p> <p>3. 玄関検温、OKだったら学生も入校可能にしてほしい。 →せっかく学校に来たのに健康観察システムを1日でも登録していない日があると入れないのはつらい。</p>
<p>16 理工学部 I</p>	<p>遠隔での質問対応の工夫（メールでの質疑応答では、記号記載が難しい）。</p>	<p>電源設備などのインフラが教室にて不足している。</p> <p>大学のネット環境が不安定（教授の回線が落ちて教授が気付かない）。カメラ設備などZoomでの無駄な時間がある。</p> <p>対面とオンラインでの評価基準の違い ・オンデマンドだとやる気が出ず、また、豆知識息抜きができない。</p> <p>空きコマ時学校内で勉強できる場所が少ない。</p> <p>出席確認の統一が不十分。</p> <p>何重にも出席確認を取っている。</p> <p>交流の場が少ない。</p>	<p>VR空間の導入（360° カメラなどを利用してオンライン参加者も対面参加者と同じように授業を受けられるようにする）。</p> <p>オンラインの学食（対面で来ている人たちとオンライン参加者が交流できる場所が欲しい）。TAの人員を充実させる。</p> <p>オンラインでのオフィスアワーを充実させて非対面の学生も質問しやすい環境を作る。</p> <p>学修内容や講義の性質によって評価の方法を検討。</p> <p>同時双方向授業がよい。</p> <p>空きコマに利用できる席を絞って設ける。</p> <p>科目によって提出先が違う。 TAや課題など複数回行われる。 講義以外での集まる場を学科毎だけでなく学部全体で企画する。</p>

<p>17 理工学部 II</p>	<p><検討中> 遠隔での質問対応の工夫（メールでの質疑応答では、記号記載が難しい）。</p> <p><理由> FD活動としての課題であり、教員間で意見交換を行い、引き続き工夫・改善に努めていきたい。</p> <p><具体案> 1. AIを活用した質問アプリを作成する。授業の質問→先生が回答。 授業以外の学校のシステムなどについての質問→AIが行う。 2. Zoomを利用する。 授業開始時に質問の時間を設ける。 オフィスアワーに合わせて質問をしに行く。 3. グループを作り、質問をしあって教え合う。解決しない場合に先生に聞く。 →インプットとアウトプットを行うことで学生の理解にもつながり先生の負担も減る。</p>	<p><課題1> 対面とオンラインで内容に差異がある （ハイブリッドで生まれる不平等性など）。 対面とオンラインどちらにするかという基準がない。</p> <p><課題2> 研究室の雰囲気分かりづらい。</p> <p><課題3> 課外学修（未来博士工房）などに取り組めなかったことや、実験、実習を行えなかったことへの対策。</p> <p><課題4> 教員の学生への教育、質問が統一されていない。</p> <p><課題5> 入館の方法の緩和。</p>	<p><具体案1> 内容が等しくなる様、対面で話した細かな補足もオンライン資料に反映させる。 オンラインとオフラインでの差があるため学生が選びにくい。今後対面とオンラインが選べるようになり、対面希望者が多すぎるという問題が発生した場合は隔週で対面にする。</p> <p><具体案2> 対面にて研究室を見学する時間を設ける。 先輩との交流などで雰囲気をつかみたい</p> <p><具体案3> 未来博士工房のシステムの再開と、実験、実習の補講を行ってほしい。</p> <p><具体案4> それらを予想できる出来事のマニュアルを作成することによって緩和させる。</p> <p><具体案5> 事前に予約を受け付けることによって図書館など入館を緩和してほしい。</p>
<p>18 理工学部 III</p>	<p>a. 遠隔での質問対応の工夫。</p>	<p>b. 教員によって使うフォームが異なる。</p> <p>c. 図書館の滞在時間が短い。</p> <p>d. 卒業研究で研究室の試料（資料？）が見にくい。</p>	<p>i. 一般教養科目などをオンライン化して時間割にとらわれず好きな科目が受講できるようにする。</p> <p>j. オンラインでアクセスできる電子書籍と論文の拡充。</p> <p>k. QRコードのトレーサビリティを用いた混雑化の見える化。</p> <p>l. 雑多な雑談ができるオンラインコミ</p>

		<p>e. タワースコラの1階導線の見直し。</p> <p>f. オンラインとオフラインの授業のつながりが不安。</p> <p>g. 実験は参加者全員毎日登校させてほしい。</p> <p>h. 対面授業を選択しているにも関わらず授業に参加しない学生への対応。</p>	<p>ユニティ。</p> <p>e. タワースコラにおけるフリースペースの増設。</p> <p>h. 授業動画をオンデマンドで残す。</p>
19 理工学部 IV	<p>a. 遠隔での質問対応の工夫。</p> <p>b. 他学部の講義の受講。</p> <p>c. 手続きの簡易化(授業のオープン化を進めるように検討中)。</p>	<p>d. 提出期限の統一。</p> <p>e. システムの共通化(moodle CSTポータル:授業支援サイト)。</p> <p>f. コミュニケーションが取れない人へのアプローチ方法。</p>	<p>d. 学科毎にスケジュールの見える化を進める。</p> <p>e. moodleでの履修登録の簡易化をする。もしくは一元管理をする。</p> <p>f. 困りごとのある学生の早期発見を進めるため、ピアサポーター(学生)を導入する。</p>
20 短大船橋校舎	<p>a. 授業の質について検討。</p> <p>b. 課題のフィードバックについて検討。</p> <p>c. 交流会(Zoom)についての検討。</p>	<p>e. 成績評価で公平性を保つのが難しい。</p> <p>f. オンラインとオフラインの混合授業形態の工夫。</p> <p>j. 対面とオンラインどちらも質問の仕方の見直し。</p> <p>h. ハイブリット授業の検討。</p> <p>i. 交流会の積極的な実施。</p> <p>j. オンライン授業の技術の共有。</p> <p>k. オンライン交流会も大学の予算を使用した。</p>	<p>e. 今後オンライン授業となる場合であっても対面試験実施を確保するなど、成績評価の公平性を保つ方法を確認してほしい。</p> <p>f. 授業ごとにどちらの方が有効的かを判断して、時間割を工夫する。もっとPCの取り扱いができるようになるカリキュラムにしていく。</p> <p>i. 例えば毎週土曜日に定期で交流会を実施するなど、学生間や先生方と気軽に交流する場があるとありがたい。</p> <p>j. PCだけでなくスマホやタブレットでも授業が受けられるようにしてほしい。</p> <p>l. Google classroomに統一することでトラブル発生時の教務課、教員、学生の負担が減るのではないかと。</p>

		1. 授業サイトが複数あり大変。	
21 生産工学部 I	a. 教職学で今後の授業の在り方を考える。	b. イベントの開催。 c. 交流を目的としたクラスの設定。 d. オンライン授業の資産・資源の有効活用。	b. 映画鑑賞など、継続的な交流につながるようなイベントの開催。 生産工学部ならではのイベントの開催。 学生からのニーズと学科の専門性をふまえたオンライン・オフラインイベントの開催。 c. オンライン上では踏み込んだコミュニケーションが難しいため、対面でのやり取りを重視した枠組みを用意。 d. 講義の教材・動画は履修終了後でも復習できるようにアーカイブ化。 教職員が作成した授業ビデオ・資料が閲覧でき、加えてデジタル学生証が使用できる、日大生専用アプリを開発。
22 生産工学部 II	a. 教職学で今後の授業の在り方を考える (セッション形式で昨年度のオンライン授業の経験を踏まえた今年度の対面授業の実施について、情報交換や意見交換を行い、教職学で考える→9月頃実施予定)。 b. 機会不足が原因で、学生の声が届いていないのではないか。	c. 対面と比較して学生の反応がわかりにくいため、授業改善がしにくい。 d. 登校することが少ないため、キャンパスについて知る機会が少ない。 e. 学部提案書の内容の周知不足。 f. 課外活動などの制限。 g. オンライン授業継続、もしくは対面授業再開における対応。	c. 授業評価アンケートの効果的な活用などを通して、学生の声を聴く、教職員の声を届けるシステムづくり。 d. キャンパス内をわかりやすく紹介した動画やマップなどの作成。 サークルなどのSNS発信。 e. 教職員への強いリマインダー+新たな提案書の発信。 f. サークルや部活動の活動制限の緩和。 g. 対面で実施した授業を動画として残り、復習で使用できるようにする。 対面とオンラインのそれぞれの良い点を相互作用させる。 科目や科目内容の対面・オンラインの決定など、教職学の話し合いによるIT化の選別。
23 生産工学部 III	a. 教職学で今後の授業の在り方を考える。 b. 自主的に学修する。 c. オンライン授業だと成績評価が高くなっているが、対面で試験した場合にど	e. 自主性が求められる。やらなければ下がる。 f. オンラインから完全対面への猶予期間を作るべきか。	e. 甘えずに行動する。 先生からの呼びかけ。 向上心を持つ。 できる人を救う環境づくり。 FDで全体に発信する。 健康観察システムとポータルシステムを同期しポータルシステムも見られるようにする。 f. テストのやり方や課題の統一など、移行期間で授業をどのように受けるかイメージを知りたい。

	<p>れだけ問題が解けるか心配。</p> <p>d. 「研究内容や計算能力といった学力の低下」「意欲的な人の減少」などオンライン授業で失ったものも多い。</p>		<p>教室内でディスタンスがとれるのか。</p> <p>カリキュラムで決められたらスムーズになる。</p>
24 工学部 I	<p>a. 授業及び課題形式の統一化。</p> <p>b. 出席確認の統一化。</p> <p>c. 課題提出先の統一化。</p> <p>d. 面接授業を録画して配信。</p>	<p>e. 他の場所にも感染症対策としてカードリーダーをつけてほしい。</p> <p>f. 出席確認を寛大化してほしい。</p> <p>g. 課題提出できたかわかりやすくしてほしい。</p>	<p>e. カードリーダーのために本館に出向くのは大変であるため、70号館に何か所か設けてはどうか。</p> <p>f. 欠席扱いになってしまうことから長期のインターンに行けない場合があるため、証明書の発行や企業からのメールで就活を公欠扱いにしてはどうか。</p> <p>g. 課題提出が出来たかわかりにくい為何度も回答を送信したり回答し忘れたりすることがあるため、回答のコピーを回答者に送信してはどうか。</p>
25 医学部	<p>すべて実施済み</p>	<p>・試験の結果や模範解答を提示してほしい。</p> <p>・試験中の退出についての明確な基準が欲しい。</p> <p>トイレのための退室を認めてほしい。</p> <p>授業資料と配付資料を統一してほしい。</p>	<p>オンライン授業に慣れているので、対面授業になっても、紙資料だけでなくPDF版の資料が欲しい。</p> <p>実習の予備日を設けてほしい。</p>
26 歯学部	<p>Googleドライブが使いにくい。提出に関する質問が多い。</p> <p>提出物の形式が学年で違う事が多いためクラスルームでの統一。</p>	<p>先輩後輩のつながりが無くなってしまう。新しく入った人とコミュニケーションを取る機会が少ない。友達の作り方がネット上になり得意・不得意ができてしまう。</p>	<p>課題提出配付方法の統一ができないか。</p> <p>新しく入った人とコミュニケーションを取る機会を用意できないか。</p>
27 松戸歯学部	<p>教員と学生間の交流の場を増やす。</p> <p>確認試験を増やす</p> <p>講義の日と実習の日を分け</p>	<p>教材管理システムがばらばら(学修支援システム, Webclass, Googleドライブ)。</p>	<p>新校舎に向けて学生の意見を反映できるように、アンケートをして欲しい。</p> <p>交流会(学生間・学生と教職員間)の開催。</p> <p>他学部のように松戸にも学生FD団体を作ると良い。</p>

	<p>る。 オンラインでの交流会の場を増やす。</p> <p>Wi-fi関係の強化</p>		<p>教室やレンタルスペースをオンラインで予約可能に。 ネットワーク登録・接続の申請の省略。講義資料の規格化・統一化。</p>
28 生物資源学部	<p>1. ハイブリッド型授業の実施。 2. 教員向けオンライン授業の講習。 3. 利用していない施設等の費用減免。 4. 学生と教員が個別に意見交換を行う場とそれを踏まえた教員同士の話し合いの場の設定。</p>	<p>先生ごとに講義スライドやPDFにばらつきがある(見易さ等)。 図書館や学生食堂等の終了時間。学生と教員が意見交換をできる場が授業評価アンケート止まり。 実験実習の中止。利用度が減った施設については、その理由を分析して、施設の改善を図る理由を図る必要があるのでは？</p>	<p>やむを得ない事情で対面授業へ参加できなかった学生への振替やオンデマンド授業を利用した補講。 電子書籍や有料論文のデータをリクエストできるような設備が欲しい。 対面でもオンデマンドでも、匿名性のある質問箱等、先生方に質問や意見を投げかけられるフォームの設置。 減免の代わりに資格や試験の受験費用にあてる。 成績に応じて奨学金を設ける。</p>
29 薬学部	<p>配信側の通信トラブル</p>	<p>1. ラーニングコモンズ・スペースを構築する。 2. 6年生以下でも使用できる既存の自習室の開放。 3. 在学生との交流の場を設けること。 4. サークル活動がしにくい状況なので学校内の活動も少しずつ許可してほしい。 5. リモート授業において教員と学生の間で意思疎通できる新たな方法を探る。 6. リモート授業におけるライブ配信とオンデマンド配信の使い分け。</p>	<p>-対面授業の制限などで学生間の交流が少なくなっているため、授業外では対面で仲間と学修することの重要性をしている。そのような学修スペースの提供をしています。研究室によっては自習しに来て良い場合があるが、実験機器や器具等で十分なスペースを取ることのできない研究室もあるため、空いている教室を自習室として開放してはしい。 学修がオンライン中心となった今だからこそ、学年を横断しコミュニケーションの重要性を感じている。制限付きでもよいので部長の申請に基づき対面での構内サークル活動実現を求める。 5. -課題に関して、しっかりと確認しているのかどうか内容を含め、授業中などにフィードバックを行ってほしい。 6. ライブ配信は生であり緊張をもって授業を受けることができ、アーカイブを見直すこともできるため、基本的にライブ配信を中心に行ってほしい。オンデマンドでは聞き取れなかった部分を巻き戻したりして本来の授業時よりも長くかかってしまう。</p>

		<p>7. リモート授業における課題の提出方法の統一化。</p> <p>8. 理解度を都度測れるリアルタイム授業アンケートのシステムの構築。</p> <p>9. 学生間での授業理解度の比較。</p> <p>10. リモート授業における確認試験や小テスト等の成績評価が真の実力に結びついていない。</p> <p>11. 授業後の課題(小テストなど)のあり方。</p> <p>12. 他学部の一部の授業を受講できる。</p>	<p>7. -何の課題がいつまでに(提出期限)出されているのか、教員も学生もすぐに見てわかるように、掲示板を作成してほしい。 -オンライン上で課題を提出する際、形式(Word, PDF等)やファイル名の指示が異なっていたり、指定がなく迷ったりするため、統一を行ってほしい。 -授業の途中で、学生がどのくらい理解できているのか調べるための簡単なアンケートを行う。Zoomにもアンケート機能はあるが、準備するのに時間がかかるため、Googleフォームのような簡単に利用できるものを用意してほしい。 -学生から質問が来た際は、匿名にして、質問内容及び回答が、その授業を受けている人全員が見られるように共有を行ってほしい。</p> <p>10・11. -小テストは復習になるのであった方がよいが、先生によっては小テストのまま試験に出す場合もあり、小テストを覚えれば定期試験はパスできる。しかし、実際にはあまり知識が身につけておらず、模試などで躓いてしまうといったことが起きるため、改革が必要である。 -教養豊かな人材育成のために、日本大学であるからこそその良さを活かして、授業のアーカイブなどを共有して他学部の授業も見られるようにしてほしい。</p>
<p>30 通信教育部</p>	<p>授業配信時間や視聴時間は教員に学修効果を理由に教員に一任している 情報発信や締切等のリマインドはシステム改修の必要があるため難しい</p>	<p>通信教育部特有の各種締切の多さがある上に、感染状況によりイレギュラーな情報変更があるなど、スクーリングがオンラインになったことによる各種通知が増えた。 1年前から多様な学修方法や多様なバックグラウンドの学生がいたが、コロナによりもっと増え、既存の学修方法が合わなくなっている。</p>	<p>情報発信の時間目安を出して欲しい。 早く出して欲しい。 学修センターのオンライン版を作って欲しい。 1対1ではなく学生同士で会話ができる場所が欲しい。 レポートを手書きの郵送から学部と同じオンライン提出にして欲しい。</p>

3. 参加者アンケート分析

本節では、当日実施したアンケートを元に「令和3年度 学生FD CHAmiT」について参加者の視点から考察する。

最初に認知度に関する設問を分析していく。

表3-1-1
今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
昨年度	89	48.0%	82	52.0%
今年度	93	54.4%	78	45.6%

出所 筆者作成

表3-1-2
今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
昨年度	73	42.7%	98	57.3%
今年度	84	49.1%	87	50.9%

出所 筆者作成

表3-1-1と表3-1-2は「FD」と「学生FD」の認知度について去年のCHAmiTアンケートの結果と比較したものである。

まず、表3-1-1から「FD」についての認知度は昨年度と比べて今年度は6.4%増加していることがわかる。さらに表3-1-2より「学生FD」についての認知度も昨年度と比べて今年度は6.4%増加していることがわかる。

以上の結果から、昨年度と比べて「FD」「学生FD」の認知度はどちらも約6%程度増加しているため、今年度はFD活動を知ってもらう為の活動を昨年度より行えたといえる。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

表3-2-1

「令和3年度日本大学 学生FD CHAmmit」は全般的に楽しめましたか？

	非常に楽しい		楽しい		普通		あまり楽しくない		つまらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年度	55	32.2%	76	44.4%	30	17.5%	6	3.5%	4	2.3%
今年度	61	35.7%	87	50.9%	19	11.1%	2	1.2%	2	1.2%

出所 筆者作成

表3-2-2

「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
昨年度	148	86.5%	23	13.5%
今年度	161	94.2%	10	5.8%

出所 筆者作成

表3-2-3

令和3年度「日本大学 学生FD CHAmmit」を通じて学部に戻り、「学生FD」について何か行動を起こしたいと思いますか？

	必ず何かしたい		機会があればしたい		学生FD組織があれば関わりたい		思わない		わからない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年度	21	12.3%	85	49.7%	16	9.4%	21	12.3%	28	16.4%
今年度	33	19.3%	94	55.0%	15	8.8%	12	7.0%	17	9.9%

出所 筆者作成

上記のアンケート結果はCHAmmitの活動を客観的に評価するにあたって重要なデータである。

まず表3-2-1を考察する。この表では「非常に楽しい」又は「楽しい」と回答した参加者が昨年度は全体の76.6%、今年度は全体の86.6%を占めており、昨年度と比較しても非常に高い数値が出ていることがわかる。「普通」「あまり楽しくない」「つまらない」と回答した参加者も昨年度より減少しており、昨年度問題であったオンライン上でのコミュニケーションを図る難しさが若干解消されたと考えられる。

次に表3-2-2を考察する。この表では「学生FDを紹介したい」と回答した参加者は全体の94.2%を占めており、昨年度に引き続き高い水準を維持していることがわかる。前述した満足度の評価も高かったことから、今年は他の学生や教職員に勧めたくなるほどの充実感を感じた参加者が多かったことが推測できる。

最後に表3-2-3を考察する。この表では「学生FD活動について何か行動を必ず起こしたい」「機会があれば起こしたい」と回答した参加者が全体の74.3%を占めていた。「行動を起こしたいと思わない」と回答した参加者も昨年より5.3%減少しており、参加者の意識が積極的になっていることが考えられる。

以上の結果から、昨年度と比較して今年度のFD活動は全体的に積極的で肯定的な姿勢の参加者が多いことがわかった。昨年度は変化したFD活動の指針に伴い様々な意見が寄せられたことで全体的に満足度が低下していたが、今年度は昨年の反省を踏まえて活動したことで満足度の向上につながったと推測できる。最後に参加者の今後のイベントに関しての意識について考察する。

表3-3-1
次年度もこのようなイベントが開催されるとしたら、参加したいですか？

	何があっても参加したい		声が掛かれば参加したい		あまり参加したくない		参加したくない		企画側として参加したい	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年度	20	11.7%	124	72.5%	16	9.4%	4	2.3%	7	4.1%
今年度	18	10.5%	128	74.9%	12	7.0%	7	4.1%	6	3.5%

出所 筆者作成

表3-3-2
今年度もZoomによるオンラインでのCHAmmiT開催でしたが、今後もオンラインでの学生交流等のイベントはあったほうが良いですか？または、何かアイデアがある場合はその他に記載してください。

	あった方がよい		対面と併用して欲しい		対面が良い		その他(アイデア)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年度	73	42.7%	66	38.6%	23	13.5%	9	7.4%
今年度	79	46.2%	55	32.2%	33	19.3%	4	2.3%

出所 筆者作成

まず表3-3-1を考察する。「次年度のFD活動のようなイベントがあれば何があっても参加したい」「声が掛かれば参加したい」と回答した参加者は85.4%と昨年度より1.2%増加した。しかし「参加したくない」と回答した参加者が昨年度より増加し「企画側として参加したい」と回答した参加者が昨年度より減少している。これは今回のCHAmmiTの内容が昨年に比べて複雑化したことで参加する難易度が上がったことが

理由として考えられる。

次に表3-3-2を考察する。「オンライン上でのイベントがあった方が良い」または「対面が良い」と回答した参加者がそれぞれ増加している。これは昨年からの授業などでオンライン状態を経験したことによりオンラインと対面の特徴を深く理解したため、意見がわかれたと考えられる。

4. 学生コアスタッフからの所感等

4-1 「また、今年も一つ進化した CHAmmiT」 竹田 蘭丸

(日本大学国際関係学部 国際総合政策学科 2年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ キャプテン)

初めに、「令和3年度日本大学 学生FD CHAmmiT」を開催するにあたり、6月からテーマや今年の動きの検討を共にしてくださった学務課及び担当教員をはじめとする多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げる。重ねて、史上最も多かった学生スタッフの皆様にも定期ミーティングなどに参加していただいたことに厚く御礼を申し上げます。

今年度、私が応募した理由としては、昨年度、学生コアスタッフとしてやりきれなかった部分があったからである。昨年度は、流れについていくのが精一杯という状態だったため、余裕がなかった。そして、今年度も私の学部ではオンライン授業が主流となった。その中で、まだまだ改善できる点が大いにあると感じ今年度も学生コアスタッフに応募したのである。

私は、題名の通り、今年度のCHAmmiTも大きく成長したと考える。そのように考えられる理由が、何点かある。

一点目は、今年度はコアスタッフ内での役割分担がしっかりと出来たことである。役割として、全体を仕切るキャプテン、インスタグラムなどの広報活動をするインフルエンサー、定期ミーティング等の報告書をまとめるセクレタリー、定期ミーティングの内容を検討するマネジメント、学生スタッフ同士の懇親を深めたりするためのレクリエーション等を企画するチームビルディング、当日のポスター作りやTシャツ作りをした美術部という風に細分化した。昨年度は、やるべきタスクが決まっても、振り分けが上手くいかなかったりした。また、昨年度のコアスタッフと今年度のコアスタッフの大きな違いでもあった経験年数の差があった。昨年度のコアスタッフは、皆が経験していたため一年間の流れが分かっていたため、誰にタスクを振っても基本的にはできてしまっていたのだ。しかし、今年は新しい人が非常に多かったため、CHAmmiT経験者がそもそも少なかったのだ。だから、一から組織化することで乗り越えることが出来た。次年度以降もこの役割分担を活用して行って頂きたい。

二点目は、スタッフは対面、参加者はオンラインという形で今年度は開催された。この形のメリットを挙げると、大人数を収容する会場を用意しなくてよいという点と、遠方のキャンパスの人たちはわざわざ行く必要がないという点である。このことは、国際関係学部にも所属している私からすると、非常に良い事だと考える。オンラインでの参加であれば、国際関係学部や工学部といった遠方のキャンパスの人たちも、気軽にCHAmmiTに参加できるのではないかと感じた。次年度以降もオンラインでの参加者を募っていただきたい。

私の反省点としては、スタッフとのコミュニケーションの方法とテーマの内容が難しいものになってしまったということである。一つ目のスタッフとのコミュニケーション方法という観点では、私の基本的なやり方としてみんなの意見を聞きながら進めるというやり方が主流であった。だから、コアスタッフのミーティングを定期的で開催した際に、意見を求めすぎてミーティングの進行が止まったりした。また、12

人という人数の都合上、コアスタッフ全員とのすり合わせを行う事にも問題が生じてしまった。例えば、土曜日の定期ミーティングを開催するにあたって、毎回テーマを策定していたのだが、ミーティングの内容に誤解が生じていて、各ブレイクアウトルームに分かれた後、各コアスタッフの間でテーマの理解が十分に共有されていなかったせいで、やっていることが違ったりしたことがあった。だから、コアスタッフのミーティングを欠席した人には別で議事録データを送ったり、電話をしたりして何とか伝達することを心がけた。また、2年連続コアスタッフという立場になって、昨年度の進め方と比較し過ぎてしまったことも反省として挙げられる。今年度は、コアスタッフの中でも CHAmmiT の例年の流れを分からない人が多い中で、私だけが流れを知っている状態であった。そのため、コアスタッフの中でも理解を得たりすることが難しかった。しかし、何とか当日までに形にすることが出来たということが幸いであった。

今年度のテーマは、昨年度の学部提案書と比較をしながら、改めて昨今のオンライン授業や対面授業のあり方に関して、話し合うというものであった。「アフターコロナ～IT化と大学教育～」というテーマで、コロナが収束した後も、オンライン授業をどこまで取り入れていくのか、どうやって取り入れていくのか、等を検討することに尽力した。このテーマに策定した理由として、昨年度の学部提案書は実現性が低い意見が多くみられた。例えば、「満員電車に乗るのが嫌だから、オンライン授業にしてほしい。」等である。他にも実現が難しい意見が多数あった。私たちは、教職員の方達とより良い授業づくりをするために CHAmmiT を毎年開催している。つまり、一方的な意見は効率的な話し合いにつながらない。私たちは、こういった点に目を付けた。そして、初の試みとして昨年度の内容とリンクさせたテーマを策定した。その結果、一般スタッフの皆さんには当日複雑なファシリテーションをさせてしまった。しかし、どのグループも特に大きな問題もなく、しっかりとファシリテーションをしてくれたおかげで、昨年度よりも実りのある意見を提案することが出来た。次年度以降の課題として、早期にテーマや方向性を策定して、できるだけファシリテーションする側の立場に立って当日のプログラムを決めることが重要であると考えている。

以上のように、当日までここにも書ききれなかったことも含めて、様々な事が起きた。しかし、重要な事は「日本大学の学生が日本大学の授業を少しでも良くしたい！」という思いであると考えている。そして、この思いが学生スタッフ全員と参加者にもあったために無事に成功させることができたと考えている。

最後に、私は今年度のキャプテンを担わせて頂いたことに感謝と誇りを感じている。改めて、6月から共に準備をして下さった学務課の皆様、多くのタスクを一生懸命こなしてくれた私以外の11名の学生コアスタッフ、当日のファシリテーションを完璧にこなしてくれた学生スタッフ、そして、当日、非常に有意義な意見や考えを提供して下さった参加者の皆様、一部分でも CHAmmiT に関わって下さった全ての皆様に感謝と御礼を申し上げる。また、今後の日本大学学生FD活動と CHAmmiT の更なる発展、飛躍を期待しつつ本稿を終わらせて頂く。

4-2 「これまでのオンライン授業とこれからの授業について」 土屋 怜王

(日本大学経済学部経済学科3年・令和3年度学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ キャプテン)

始めに「令和3年度 学生FD CHAmmiT」開催にご協力いただいたスタッフ、教職員の方々に感謝申し上げます。

日本大学では、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、令和2年度よりオンライン授業を実施していた。私が所属する経済学部では、今年度に入り部分的に対面授業は始まっていたものの、ほとんどの授業がオンライン形式をとっていた。そのため、私は入学からほとんどの授業をオンラインで履修していた。さて、日本大学では「自主創造」を理念に学生が大学生活を送っている。私は、この理念と当時の生活に疑問を感じ、「自ら道をひらく」フィールドを求めて CHAmmiT に参加した。

学生スタッフは、CHAmmiT の企画を行うコアスタッフと主に当日の運営をする一般スタッフに分かれ

ており、合わせて50人規模である。活動内容は、年1回行われる学内でのイベントに向けて半年間準備をし、イベント当日のファシリテーションで一般参加者の意見をまとめながら学部に提出する意見書を作るというものだ。私は、コアスタッフ各部門の人手不足の穴を埋めつつ、全体としてイベントが成功するように、一般スタッフに繰り返しイベント当日について説明してより充実した学部提案書を提出できるように努めた。

CHAmmiT本番でファシリテーションを行うのは一般スタッフであるため、彼らが質問しやすい環境を作ることに力を入れた。当日は、私たちコアスタッフはCHAmmiT全体が滞りなく進むように問題がある場所に駆け付ける役割をするため、各グループのファシリテーションにはほとんど関わることができない。そのため、一般スタッフがきちんと自分たちでファシリテートできるようになってもらう必要があった。わからないことは小さなことでも解決してもらうことで、当日自信をもってグループワークをすることができると考えており、一般スタッフ向けに練習会を開いたり、LINEのオープンチャットやメール等で質問しやすい環境を作ったりして疑問を解消した状態で当日を迎えられるようにしていた。その中でも一般スタッフのファシリテーション練習会は、できるだけ多くの学生スタッフが参加できるように5日連続で開催し、コアスタッフが分担してシフトを組んで直前期の緊張の中取り組んでいたと思う。

活動を終えて、コミュニケーション能力の向上を実感している。集まってくれるメンバーの多くは、大学やアルバイト、ボランティア、インターンなど掛け持ちしていることが多く、二刀流、三刀流で活動していた。そのため、ときにはグループワークが疎かになってしまうことがあった。しかし、本気でプロジェクトを成功させるために、忍耐強いコミュニケーションをとりながら準備を進める中で、自然と士気が高まって、それぞれが積極的に課題解決しようという姿勢になったときには本当に達成感を感じた。

また、CHAmmiTに参加した学生には次のことを意識して授業に臨んでほしいと思う。一つは授業を担当している先生方の立場や大学側の立場について考えることだ。CHAmmiTでは、それまで授業について抱いていた不満や要望がなぜ生じているのかを真剣に考えることができる。また、それらの問題のバックボーンについても理解できる。この経験を生かして授業により一層主体的に臨む姿勢を持ってほしいと思う。二つ目は大学に通う目的を考えることだ。授業を受ける理由を明確にすることで、大学に通う理由を改めて考えることができただろう。CHAmmiT参加者がこれらを忘れずに意識してこれからの授業に向きあっていくことが日本大学の教育改善に最もよい効果を生み出せると信じている。

4-3 「NEXT STEPにつながるCHAmmiTに」 古家 凌成

(日本大学商学部商業学科4年・令和3年度学生FD CHAmmiT学生コアスタッフ)

およそ半年間にわたって準備を重ねてきた、「令和3年度日本大学学生FD CHAmmiT」が令和3年11月28日に開催された。私は昨年度の学生スタッフに続き、コアスタッフとしてCHAmmiTの運営に携わることとなった。

12名在籍するコアスタッフの中で唯一の4年生として参加したため、これまでのCHAmmiTの改善点や新たな運営面での課題点を踏まえながら、今年度の企画にシフトしていく役目を果たした。学生スタッフも含めると、およそ50名というCHAmmiTの中でも最大規模のスタッフ数ということもあり、コアスタッフ間でタスクを細分化するなど、効率よく運営を担える方法を模索しつつ定例会議を重ねていった。また最高学年として自らが率先して動くことにより、他スタッフも積極的に行動に移すことができるように、全体を考えながら過ごすことができたと思う。その結果が当日までのスムーズな運営につながったのではないかと感じる。

また今年度のコアスタッフとしての活動は学生一人ひとりの個性が存分に活かされ、コロナ禍における学生交流や社会進出にあたっての貴重な経験になったのではないかと考える。オンラインでの定例会議や懇親会が今年度もメインとなってしまう、直接的な交流は前日のリハーサルと本番のみとなってしまったが、

学生同士の交流機会が減ってしまった今日の中では高頻度かつ長期間にわたって実施できたのではないかと感じる。特に同じ日本大学に在学しているという共通項からより一層の団結力が増し、本番までほとんどのスタッフが欠けることなく開催当日まで走り切ることができた。

来年度のCHAmmiTは10回目の節目となる予定だ。私は今年度をもって日本大学を卒業するため、スタッフや参加者としての携わりはこれまでより難しくなってしまうが私自身が得た経験を来年度のスタッフと共有し、より充実したイベントになることを願っている。

4-4 「美術部からみた『CHAmmiT』」 渡部大雅

(日本大学文理学部中国語中国文化学科3年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ
美術部)

11月28日に開催された「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」は、学生FDが導き出したコロナ禍における活動の集大成ということができる。

私自身は、昨年度に一般学生として参加し、今年度はコアスタッフとして、主にポスターやTシャツ、マニュアルや二種類の説明スライドなどのデザインを手がけた。これは、「CHAmmiT」以前にもPowerPointを用いたデザインの経験があったため、美術部の代表者に選ばれたからである。美術部の反省点としては、いくつか挙げられる。

一つ目は、スケジュールに十分な余裕が設けられていなかったことである。ポスターのデザイン案は、私とそのほか2人の合計3人がそれぞれ作成した。美術部はこの3人で構成されており、美術部の全員がデザイン案を作成し、実際に採用されたデザイン案はそのうちの一つである。その他の2人が作成した案は、TwitterやInstagramでの広告に用いることを計画していたが、ポスターやマニュアルの修正などの思わぬ作業が重なり、気づけば本番の直前となっていた。これについては、事前に十分に余裕のあるスケジュールを計画し、不測の事態に備えることで防げた問題であると考えられる。特に「CHAmmiT」のような、多くの人々がかかわるイベントでは、予測を大幅に上回る問題が発生することがある。その中でも、デザインを手がける美術部の仕事は、感染症対策下では非常に顕著なことであるが、社会状況の変化によって記述すべき内容が左右されやすい。また、宣伝に用いるポスターは、その宣伝効果を高めるためにも、完成する時期としては、いくら早くても早すぎることはない。これらのことから、他の部門と比較しても、美術部のスケジュールは最も余裕を設けるべきものであると感じた。ただし、「CHAmmiT」開催にかかわる詳細情報の決定が遅れたために、あらゆる部門における作業の開始が遅れたことにも、触れておかななくてはならない。もちろん、感染症対策下では、何事も早期の決定が難しいという事情があることは言うまでもない。しかし、早いに越したことはないのである。

二つ目は、デザインを仕上げるための学務課とのやり取りに時間がかかったことである。これも感染症対策下に特有の現象であるが、対面での話し合いができず、オンライン会議やメールでのやり取りに限定された。その中で、デザインのチェックや修正の要求はその都度なされ、本番の直前まで続けられた。対面であれば二度程度で済んだと思われるチェックも、メールで行えば幾度にもなってしまう。こうした非効率性が重なり、スケジュールが遅延する原因の一つとなった。また、デザインを行うにあたって、前年度に使われたポスターのほかに、デザインの基準となる基本的な要求が示されなかったことも、作業が遅れるきっかけとなった。状況は常に変化し、求められる情報も、その時々で変わるものである。これからの「CHAmmiT」では、その年度ごとに適した要求を明確に示し、後々の修正作業を効率化させることに尽力するよう、提案する。

ここまででは、ひたすらに課題を書き連ねてきた。しかし当然ながら上手くいった箇所、つまり私たちの「成功」といえる事柄も存在した。特筆すべき「成功」は、ポスター、Tシャツ、説明スライドにおけるデザイ

ンの方針を統一したことである。これまでの「CHAmmiT」では、カラーが統一されていなかった。しかし、統一されたカラーを設定すれば、宣伝もより容易になると考えていたため、真っ先に今回のテーマカラーを決定したかった。結果としては、今回の「CHAmmiT」のテーマカラーは、「レッド」であった。これはたまたまポスターのデザイン案を赤色に設定したところ、コアスタッフの「受け」がよかったので、自然な流れで決定したものである。そしてその流れを受け、あらゆる箇所に「レッド」を多用した。こうした一貫性は、TwitterやInstagram、ホームページなどに統一感を生み、結果としてスタッフの間におけるモチベーションを高める要因ともなった。これらのことは、来年以降にも活かすことができると考え、完全対面での準備、開催が実現すれば、効果はさらに高まると予想できる。

以上のように、課題と「成功」とが存在した今回の「CHAmmiT」は、コロナ禍を経て手に入れた、私たち学生FDの成果の集大成といえる。かつてない規模にわたって感染症が流行する中で、このようなイベントにかかわれたのは非常に大きな喜びであり、誇りとなった。この報告が、来年以降の「CHAmmiT」の助けと支えになることを願う。

4-5 「オンラインという逆境をチャンスに」高野 敦子

(日本大学経済学部金融公共経済学科3年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ
チームビルディング インフルエンサー)

初めに「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」開催にあたり、ご協力いただいた学生、教職員の皆様に御礼を申し上げます。コロナ禍において、大学全体のイベントを開催することができたのは、関わっていただいた皆様のお力添えがあつてこそだといえる。

私は大学3年生になるまで、日本大学において学生が参画するFD活動が存在することを知らなかった。大学の教育改善に関心を持ってこなかったのである。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延によりオンライン授業が余儀なくされた2020年度を経て、教育の変革に関心を持つようになった。時を同じくして、ゼミナールの教授からCHAmmiTのスタッフ募集について声をかけていただいた。私は、変容する大学教育に一石を投じる機会を作りたいという思いから、コアスタッフへ応募した。

今年度は、コアスタッフが12名、学生スタッフが約40名と例年に比べて大所帯だったため、コアスタッフの役割分担を実施した。私は、チームビルディングとインフルエンサーの二つの役割を担うこととなった。そこで私からは、二つの役割で関わったCHAmmiTについてコメントしたい。まずチームビルディングでは、コアスタッフと学生スタッフのコミュニケーションを図り、チームとしての発展を目指した。顔合わせからリハーサル前のミーティングまで完全オンラインでの実施ということもあり、親交を深めることは重要かつ難しい点であった。そこで、CHAmmiTの公式な活動とは別にオンライン懇親会を複数回企画し実施した。自由参加としたが毎回10名以上が出席し、にぎやかな時間を過ごすことができた。互いの大学生活について語り合うほか、オンラインでできるゲームやビブリオバトル(知的書評合戦)などを実施した。他学部の学生との交流を一つの目的としてCHAmmiTに参加する学生も多いため、懇親会の実施は有効的だったのではないかと感じる。課題としては、参加メンバーがある程度固定されてしまったことだ。より多くの学生に気軽に参加してもらうことを目標としていた。しかし、オンラインによるコミュニケーションの取りづらさや、公式な活動と別に時間を割かなくてはならない点がネックになった。オンラインでのコミュニケーションには、さらなる工夫が必要だったと反省している。しかし、親密な関係を構築した状態であれば、時間や場所を選ばないためオンライン懇親会の実施はメリットが多い。来年度のCHAmmiTが対面で実施できるのであれば、後半の活動にオンラインという手段を取ることも効果的だと考える。次に、インフルエンサーとしてはInstagramとTwitterを運営し、CHAmmiTの広報活動に力を入れた。Instagramでは、ミーティングの様子や懇親会の様子を投稿し、近況報告と今後の動きの予告として活用した。例年に比べても投

稿数が多く、半年間の記録を視覚的にとらえることができるだろう。Twitterでは、ミーティングの報告書を公開した。Instagramに比べて消極的な動きになってしまった点が反省点である。また、双方にいえることで、フォロワー数を伸ばすことができなかつた点に後悔が残る。日本大学の学生や全国の教育現場に関わる人々に有効的に影響を与えることができなかつた。来年度の活動においてSNSを利用するのであれば、積極的にターゲットとなるアカウントをフォローしていく必要があるだろう。

最後に、就職活動やゼミナール、授業と多忙を極める大学3年生の半分をCHAmmiTの企画運営に充てることができたのは、共に活動をしてきたコアスタッフの存在が大きい。教育改善やイベントへの思いから、意見がぶつかり合うことも多々あった。しかし、そのたびに納得がいくまで議論を交わしてきた。そんな我々の間には、今回のCHAmmiTへの熱意と確かな団結力があつたといえるだろう。この点に、FD活動に学生自身が参画する意義があつたと考える。私はCHAmmiTを通して、大学教育への関心を深めるだけでなく、共に成長できる仲間と考え、行動に移す機会を得ることができた。その結果、大学教育をよりよくするための提案を学生、教職員の皆さんによって抽出することができたのだ。今後も「日本大学 学生FD CHAmmiT」が、学生、教職員、そして日本大学にとって意義のある活動となるよう願っている。

4-6「みんなが知らない私のこと」 後藤 菜月

(日本大学国際関係学部国際教養学科3年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ チームビルディング)

私から①「日本大学 学生FD CHAmmiT」に参加した経緯、②反省・改善③この活動を通して得たもの、この3つについて述べていく。

①「日本大学 学生FD CHAmmiT」に参加した経緯

私がこのイベントの企画運営に携わろうと思ったきっかけは、2つある。1つ目が「教育とは何か」について考える機会があつたからだ。学校の授業や本、ボランティアを通し「日本の授業」に対する違和感があつた。2つ目が、この活動をきっかけに「コミュニケーション能力を伸ばしたい」。そう思ったからだ。コロナ禍により、人と接する機会が減つた。かつ、学校もオンライン授業。コミュニケーション能力を伸ばすには、まず「人と関わる機会を増やし、話すこと」が大事だと感じた。

②反省・改善

反省は2つある。1つ目が、体力的な問題があつたこと。2つ目がメンバーに自分の意見や気持ちをきちんとぶつけられなかつたこと。

1つ目は、私自身疲れやすい体質であつたこと。そのため、ミーティングの最中に眠くなつたり、頭の回転が鈍いタイミングでの活動によって本領を発揮できなかつたと感じる。2つ目は、メンバーに自分の意見や気持ちをきちんとぶつけられなかつたこと。ミーティングの最中に、自分の意見を言いたい場面はたくさんあつたが、どう言葉で表現したらよいかわからなかつた。また話がまとまらず、何を言っているかうまく伝えられないことが多かつたと感じる。その2つの反省を踏まえて、自分なりに改善したことがいくつかある。体力に関しては「ジョギング」や「ウォーキング」といった習慣を作つた。また「仮眠」などを取るようにし、なるべく体力を温存するようにした。他にも栄養が足りていないのかもしれないと思い、サプリメントを取り入れるといったようなこともした。自分にできる限りのことをした。気持ちや意見を上手にまとめられないことに関しては、紙に一度まとめてから話すことやとにかく一所懸命話すことで思いを伝えた。意外と一所懸命話すと、話がまとまらなかつたか相手は意味を汲み取ろうと努力してくれた。

③この活動を通じて得たもの

人と関わることの楽しさを改めて感じた。様々な価値観、様々な環境、様々な思いをもつた人と関わることができ、とても刺激になつた。相手と比較し、自分は劣っていると自信を無くすこともあつたが、それ

以上に楽しさが勝ったと感じる。自分のできること、できないことを知る良い機会だったと感じる。できないことに目を向けるよりも、「自分には何ができるかを考え、その能力を伸ばす」ことの大切さなども知った。「自分を知る、自分と向き合う」良い機会だったと感じる。

4-7 「学生FD CHAmmitでIT化について話し合う大切さ」 西村 憲人

(日本大学国際関係学部国際教養学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmit 学生コアスタッフ
マネージャー)

先ず、「令和3年度 日本大学学生FD CHAmmit」の開催にあたり、お力添えをいただいた教職員の方々、及びスタッフを始めとする多くの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。そして、この学生FD活動に今回初めて参加をし、至らない点も多々あった私に対し、様々なご支援をして下さった周りのコアスタッフの方々にも、深く御礼申し上げたい。

コロナウイルスというパンデミックと通信技術が、オンライン授業というものを、大学に普及させたのである。たしかに、オンライン授業により、友達作りや、コミュニケーションをとる機会が少なくなるという理由で、否定的に捉える者が多い。実際、学生生活でオンライン授業しか受けたことが無かった私にとって、多くの学生と親睦を深めるだけでなく、大学の教育に関するテーマに対し、有意義なディスカッションが出来る機会が設けられているこの学生FD活動が、魅力的なものであった。このような経緯から、この活動に参加をし、「日本大学 学生FD CHAmmit」の開催に向けて、教職員や学生スタッフと定期的に行うミーティングを企画するマネジメントを行ったのである。

さて、オンライン授業を否定的に捉えず、肯定的に捉えてみるということ、そしてコロナウイルスの収束後、コロナウイルスの流行前に行われていた授業形態に戻すのではなく、コロナ禍で得たオンライン授業のメリットを活かした大学教育にしてみてもどうかという意見から、このことを本学のFD活動が開催するイベントであるCHAmmitを通じて、多くの教職員と学生で話し合いたいという経緯で、「IT化と大学教育」を本年度のイベントのメインテーマとした。そして、実際にこのイベントを通じて、多くの学生が、オンライン授業に対し、何かしらのメリットを感じており、アフターコロナのキャンパスライフにオンライン授業があることに肯定的だったことが見受けられた。それは、IT機器を用いた授業の利便性だと考えられる。例えば、自宅で授業が受けられるという点である。特に体調が優れない日は、オンライン授業に有り難みを感じるのではないだろうか。

コロナ禍での、学生FD CHAmmitで話し合った「IT化と大学教育」は、極めて有意義なものであった。とはいえ、パンデミックの収束後も、更なる通信技術の発達により、私たちは大学教育のIT化が加速することについて、向き合う機会が出てくるだろう。その際、本年度のFD Chammitで出た意見やアイデアが、その参考として、一役買うことがあれば、本活動のマネージャーとして携わった者として、嬉しい限りである。

4-8 「コロナ禍における学生FD CHAmmitの大きな意義」 合原嘉成

(日本大学法学部法律学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmit 学生コアスタッフ マネジメント)

初めに「令和3年度 学生FD CHAmmit」開催にあたり、ご協力いただいた全ての皆様に御礼を申し上げます。

私からは、大きく二つに分けてコメントさせていただきたい。

一つ目は、このCHAmmitの意義についてである。ここでは、コミュニケーションの場と授業改革の場という二つの視点からコメントする。私は、昨年度一般スタッフとして学生FD CHAmmitに参加した。新型コロナウイルス感染拡大のためほぼ全部の授業がオンラインで行われ、コミュニケーション機会が少なくその機会を求めていたからである。実際に参加してみると、話しやすく、リラックスした環境で自分の意

見が言えていたと感じる。コミュニケーション機会が少ない自分にとっては、自分の意見を主張する場、他人と意見を共有する場としても、貴重な場所であったと感じる。昨年度は、大学としても初のオンライン授業というのもあり、授業に対する不満や改善点など多く感じていた。実際、同じグループになった人からも多くの不満や改善点が出てきた。そこで、学生FD CHAmmiTを通して、学部提案書を作り提出したところ、今年度(2021年4月)から大幅に授業の質及び受けやすさが改善された。私自身、その変化を大きく実感した。これらから感じることは、学生FD CHAmmiTの重要性である。私は、このイベントがあるからこそ日本大学は良い方向へ変わっていくのだと考える。

二つ目は、私が今回コアスタッフとして参加した理由である。一つ目の理由で述べた通り「学生FD CHAmmiT」は日本大学及び日本大学の学生にとって重要なイベントである。そこで、私はこのイベントの重要性を広げていきたいと考え昨年の一般スタッフとしての経験を踏まえて、コアスタッフとして参加を決意した。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインによるミーティング及び開催となった。オンライン上で限られた時間の中でのミーティングであり、一般スタッフとコアで打ち解けるのに時間がかかったと感じる。また、正直なところ人数も多く一般スタッフ全員が当日しっかりとファシリテーターをやり遂げられるかが不安だった。しかし、本番2週間前からファシリテーション練習会を開くことによって徐々に全体のファシリテーション能力が上がっていくのを実感し、不安も減っていった。そして、迎えた本番は特に大きな問題もなくチャットをやり遂げることができたと感じる。これは、皆が一つとなってやり遂げた結果だと感じる。

「日本大学学生FD CHAmmiT」は、学生及び大学にとってとても重要なイベントである。来年度以降もこのイベントが続き、日本大学の教育がますます発展していくことを心から願っている。

4-9 「CHAmmiT 取説」 柴田大輝

(日本大学生物資源科学部生命化学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ)

この度、初めて学生FD CHAmmiTというものに関わらせて頂いた経緯と感想、そして、反省等を記したいと思う。

先ず、経緯としては至って単純である。

このコロナ禍において授業、サークル活動、イベントなど何もかもが停滞し、友達1人作るのが困難な状況において、何もしないことが大変もったいなく感じ、人との関わりや大学生である今しかできない経験ができるのではないかと思い応募した次第である。

もっと簡単に言うなら、大学っばい友達作りをするためである。

先に結果を言わせてもらおうと、大いに満足いく経験とつながりができたように感じる。

普段関わることのない学部、学科が異なる人たちと毎回のミーティングを通してコミュニケーションを取っていく中で、コロナ禍での授業の雰囲気や学生のあり方、生活状況、また、コロナ禍での様々な考え方や行動など自分とは環境、境遇の異なる話を聴けたことは大変貴重な経験であり、そういった中で同じ活動に参加した人たちというのはこのような状況の中で何かを思い、考え、行動しているかがうかがえた。

普段の活動はこのようなご時世であることから、全てオンラインでの活動となったが、本番では制約があるものの無事、対面で行うことができ、毎回のミーティングや練習、定例会など準備をしたおかげで、非常に満足のいく結果となった。

そのおかげで、大変有意義な時間を過ごすことができた。

参加者の方々からも非常に好評で、来年も参加してみたいという声や知り合いや友人にも勧めたいといったような前向きな意見を多くいただき、自己満足ではなく、みんなに楽しんでもらいながらも中身のある結

果となり、約半年もの活動が実を結んだものとなった。

しかし、反省点もいくつか挙げられる。

先ず、今年度のコアスタッフは12人と例年よりも多いことからタスクを細分化し効率よく運営していくために、コアスタッフ内で役割分担し5つの部署に分かれて活動していきなかつた。それぞれの部署間での考え、やり方、報連相などの意思疎通が難しい場面などが見られた。

これを改善出来れば、ダブルブッキングを防ぎ、ほかのことに時間を回せ、効率的にタスクを消化できたのではないかと思案する。

また、学生スタッフや参加者などの途中辞退なども多いのも懸念点の一つであると考えている。本番に向けて、人数が決定していたり、役割の割り当てを決めていてもこれでは抜ける度、毎回の微調整に頭と時間を費やすことになり進むものも進まず、ほかのスタッフにシワ寄せがいくのは違うように感じた。

このことは学生FD CHAmmitの知名度にもつながるのだが、この活動についての認知度が低いことにも起因しているように感じる。

どのような活動で、どのくらいの期間するなどの5W1Hの説明やスタッフ募集、参加者募集など宣伝が全然できていないように思う。

自分が見つけたのもたまたまであり、それ以降案内を見ることがなかった。

そういったことを改善することで、このような活動に興味はあるがよくわからず迷っている学生やただ存在を知らなかっただけで実は積極的に活動したい学生を発掘できたかもしれないことを思うと実に惜しく感じる。

いずれにしろ学生FD CHAmmitという活動が自分に与えた影響は大きく、学生生活においても大変有意義な経験、時間を得られたように思う。

また、この活動を見つけ、半年関わらせていただいたことを誇りに思う。

教職員の方々と学生が参画し大学教育を変えようというかなり難しいものではあるが、来年度のスタッフにはこれらの反省を活かしつつ、その年度にあったやり方を模索していき更に良いものにしていき、日本大学の教育が少しずつでも発展し学生も教職員の方たちも前を向けることを心から願っている。

4-10 「インフルエンサーとアフターコロナ」 曾山はるか

(日本大学生物資源科学部動物資源科学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmit コアスタッフ インフルエンサー)

初めに、「令和3年度 日本大学学生FD CHAmmit」開催にあたり、力を貸していただいた教職員及びスタッフを始めとする多くの関係者の皆様に深く御礼を申し上げる。今年度の開催にあたっては対面とオンラインの併用型を導入したことから、多くの配慮や準備をしていただき、感謝申し上げます。

私は今年度、コアスタッフとして初めてFD活動に携わった。コアスタッフに応募したのは、多くの学生とかかわる機会が欲しかったからだ。私が日本大学に入学したときは新型コロナウイルスの感染が拡大しており、授業はすべてオンデマンド型だった。そのため大学1年次は学生とのかかわりがほぼなく、学生がどのような思いを持って生活しているのか全くわからない状態であった。そんな時に目に留まったのが、FD活動におけるコアスタッフ募集のメールだったのだ。結果、FD活動に携わっていなければ出会うことがなかっただろう他学部、他学年のスタッフや参加者、教職員と交流出来た。それだけでなく、さまざまな人の意見や考えを聞くことで、視野が広がり物事を多方面から客観視する力も養うことが出来た。FD活動の目的はあくまで日本大学の教育改善だが、この活動を経て私自身も大きく成長することが出来たと考えている。

ここからは今年度の活動の反省を2つ述べようと思う。まず1つ目に、広報活動の反省について述べる。コアスタッフ内では役割分担をし、私はSNSを活用して広報活動を行うインフルエンサーを担当した。イ

ンフルエンサーに応募してくださった学生スタッフとともにインスタグラムとツイッターの公式アカウントを通してスタッフミーティングの様子などを広報することができた。特にインスタグラムでCHAmmiT開催20日前から掲載したカウントダウンは、コアスタッフ・学生スタッフの紹介も掲載したことでアカウントをフォローしてくださっている方にFD活動を身近に感じてもらうきっかけになったのではないかと推測している。ただ今年度はアカウントのフォロワーを大幅に増やすことが出来なかったことが反省点として挙げられる。来年度は、昨年度や今年度とは異なる新しい企画を計画したり、スタッフがSNSを通して呼び掛けたりすることでフォロワーを増やし、CHAmmiTの知名度向上に貢献することを目指してほしい。広報活動は、FD活動を知らない大学生を始めとした一般の方や活動を応援して下さっている方との懸け橋となる、大変重要な活動である。広報活動が積極的になれば、間接的ではあるがCHAmmiTのステップアップに確実に繋げることができる。そのため、来年度以降も広報活動には力を入れて取り組んでほしい。

2つ目に、今年度のテーマの反省について述べる。今年度のCHAmmiTは「アフターコロナ～IT化と大学教育～」というテーマを掲げて活動した。昨年度の内容を引き継ぎつつ、新型コロナウイルス収束後の大学教育の在り方について充実したディスカッションを行うことが出来た。その一方、開催後行われた反省会では、学生スタッフから「内容が複雑で参加者に理解してもらうのに時間がかかった」「参加者から難しいという声があった」という反省が多く寄せられた。振り返ってみると、ファシリテーターは当日のやるべきことが例年と比較して複雑化していた。そのため参加者も難しいテーマであると捉えてしまったことが考えられる。その反省をふまえ、来年度以降は学生スタッフがファシリテーターのポジションを練習する期間を多くとり、本番に備えてほしい。またディスカッションの内容を単純化、明確化させることも重要だと思う。

最後になるが、約半年間コアスタッフの一員としてFD活動に携われたことを心から名誉に思う。そして、来年度以降の学生FD活動のさらなる発展を心より願っている。

4-11 「CHAmmiTの反省」 佐藤喜一

(日本大学通信教育部法学部政治経済学科2年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ チームビルディング)

私は以前別の大学に通っていたことや、複数の団体に所属している経験をもとに私の携わったCHAmmiTの業務内容と来年度への改善点についてコメントしたい。

まず、コアスタッフのチームビルディングとして行った業務はCHAmmiTスタッフが本番までに良好な関係を築けるよう懇親を深めたり、わだかまりを減らすためにミーティングとは別に懇親会等を企画運営したりすることだ。

CHAmmiTは全学をあげて準備を行うため理系文系問わず50名程度の学生スタッフが集まる。そのスタッフ間の関係を構築することは普段対面授業のない通信教育部に所属している私からするととても魅力的な業務だと思い参加した。

序盤はCHAmmiTスタッフが総勢50名という規模や、今年度も新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、オフラインの交流は難しく全員が友人になるということは不可能と判断し、業務上支障のないような関係性を構築する事を目標とした。そのため、内容は「日大で新しい学部を作るなら学部とキャンパスの場所は？」というようなCHAmmiTに関連するトークテーマで会話をしてもらうことにした。

しかし、参加者の多くは友人関係を築きたいというニーズのもとで参加していることを知った。それ以降は「ワードウルフ」や「麻雀」のような遊びを中心に懇親を深めていくことにした。

チームビルディングとしての反省点は最初の目標設定だと考える。50名を全体としてとらえてしまっていたが、当日は学部ごとに分かれて行われるため学部でチームを分けることで50名という規模のデメリットを解消することができた。また、アンケートフォーム等で学生スタッフのニーズを吸収することで運営と

参加者の意識の乖離も解消できたと考える。

また、チームビルディングはただ遊ぶための時間をつくるのではなく、チームとして「CHAmmiTを成功させる」「日本大学の教育改善を行う」という目的に向かい1つのチームをつくるのが目的である。終盤はその意識が薄れてしまっていたため、来年度は最初の目標設定と目的に向かいブレないチームビルディングを心がけたい。

さらに、コアスタッフのメンバーとしての反省点は先の見えない運営であったと考える。

コアスタッフの目的は50名の学生スタッフをまとめ、教職員と意思疎通をしっかりと図り、CHAmmiTの準備を行うことであったと理解している。

しかし、実際にミーティングが始まるといつまでにどれだけの量と種類の仕事をこなさなければならないかということが直前になるまで分からないということが多かった。CHAmmiTのゴールとコアスタッフとしての業務内容が不明であったことや、大学が求めていることや昨年までの様子が理解できず方向性を見失いコアスタッフ内で意見の衝突が生まれてしまった。昨年度参加者は昨年度の様子を体験しているが、引継ぎ資料はないため経験をもとに話さなければならず、今年度参加者は昨年度参加者や職員へ過度に情報を求めてしまい、昨年度参加者やキャプテンへの負担が大きくなってしまった。

他にもコミュニケーションツールの導入により透明性のある意思決定や欠席したメンバーへの配慮を目指したが、議事録のない意思決定や議事録を読まずにミーティングへ参加したことによる情報不足などにより、別のツールによるリマインドという不要なタスクが発生してしまった。また、議題や時間設定があいまいなミーティングにより、時間を超過したミーティングが増えてしまいコアスタッフの負担が増えていた。

CHAmmiT学生スタッフとしてはCHAmmiTの全体感と趣旨を途中から見失うことが増えた。CHAmmiTは全学から多くの学生を集めるために自薦と学部の推薦という制度がある。そのため、全員が日本大学の教育改善に向けて参加しているが、どうしてもスタッフや参加者の中でモチベーションに差が出てしまう。中には学部のテストや私用によりミーティングへの参加や、チームビルディングやファシリテーションの練習会への参加も難しく、途中で辞退してしまう学生が毎年でている。モチベーションの維持が難しい環境があったと考える。

また、CHAmmiTに参加した学生だけでなく教職員も全体を把握できていないと感じた。全体を把握していない状態でこの規模のイベントを催行したこと、統括する立場がいなかったこと、ビジョンが共有できていないことは来年度への反省だと考える。

私が来年度へ向けて最も改善したい点は継続性だ。CHAmmiTは毎年数人のスタッフが前年度より継続でスタッフになるが、前年度より引き継ぎの資料はなく、どうしても特定のスタッフの記憶を頼りにしなければならず、負担が大きい。また、参加者からアンケートはとるもののCHAmmiT本番1回の参加のため参加した意義を見出しにくい。

また、今年度に出た意見が来年度以降どう改善されているのか実感することが難しく、継続的な参加のモチベーションを維持できない。

これらのことから、私はCHAmmiTの引継ぎと参加者への報告、学部FDと連携をとりミニCHAmmiTのような継続性のある活動を提案したい。

また、召集の段階でCHAmmiTのスケジュールの詳細や目標、目的などの軸になることについては時間をかけて設定することで統一感をもったチームビルディングが容易になり、年間を通し充実した活動ができると考える。

私は学生会のような学生の意見を届ける組織がなく、多くの学部がある大規模大学の日本大学のFD CHAmmiTという活動はとても意義のある活動だと考える。その一翼を担えたことは今後の日本大学生としての誇りであり、卒業後も日本大学のために貢献したい。

4-12 「CHAmmiT を終えて」 垂見 麻衣

(日本大学通信教育部商学部商業学科1年・令和3年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ
セクレタリー)

CHAmmiT にコアスタッフとして参画するに至ったモチベーションは2つの側面から議論することができる。

1つは、私的な側面で、このコロナ禍においてオンラインでの授業がベースとなり、人との接点が希薄化する中で、交流をもっと増やし、より良い大学生活に繋がりたいという思い。もう1つは、公的な側面で、日本大学の現状を客観的に分析し、良いところ悪いところを整理したうえで、前者をさらに発展させ、後者の改善を図り、さらに学部間の分断を解消することで、より良い日本大学の実現に向けた改革を担いたいという思いがあった。

今年度のCHAmmiT は、スタッフは対面形式、参加者はZoomを用いたオンライン形式とするハイブリッド形式で開催された。コアスタッフとして運営側に携わり感じたことは、キャプテンのリードのもと綿密なミーティングを重ね、本番に向けてしっかりと準備を図っていること、スタッフ全員に何らかの役割をアサインすることで、スタッフひとりひとりの当事者意識や自己有用感を醸成していることが顕著に見られたことが印象的だった。この全員を巻き込むアプローチは準備段階のみならず、CHAmmiT 本番当日の運営においても見られ、CHAmmiT 成功の大きな要因のひとつとなっていると言える。

敢えて改善点を挙げるとするならば、もっと早い段階でテーマを定め、本番を想定した形でのファシリテーション練習をより多く重ねられると、コアスタッフのファシリテーション能力の向上と、CHAmmiT 本番におけるより円滑な議論に繋がるだろう。

コロナ禍においてオンライン化が急速に進む中、様々なネガティブ要因をオンライン化そのものに見出すとする動きがあるが、CHAmmiT に関してはこれに当てはまらず、例えば初期の準備段階で見られたスタッフのモチベーション低下の問題は、オンライン化が原因なのではなく、CHAmmiT の方向性がしっかり共有できていないこと、言い換えるとCHAmmiT の最終形、ゴールを各自がしっかりイメージ出来ていなかった事に起因している。こうした状況を一部のスタッフに過度の負担を負わずことなく回避するには、CHAmmiT のコアスタッフの任期に若干の幅を持たせ、前年度のコアスタッフと次年度のコアスタッフとの間にオーバーラップ期間を設け、確実に引き継ぎ作業が実施できるようにするのが望ましい。

今年度のハイブリッド開催のCHAmmiT は、決して完成したものではなく、まだまだオンラインでの活動に改善の余地と可能性を感じることができた。今後の学生FDの発展のために更なる決意をもって行動していきたい。